■安積中学校■安積高等学校在京同窓生

東京桑野会会報

●2024年4月1日発行●発行･編集人 石井俊一●発行所 東京桑野会事務局 〒104-0061 東京都中央区銀座八丁目８番15号 青柳ビル７階 石井綜合事務所内

母校創立 140 周年記念号

「旧本館（安積歴史博物館）」
小島礼成（138期）

No.46

①桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた同窓の親睦の会であること

②会員はみんな仲良く相親しみ楽しい会であること

③何らかの意味で会員の頼りになるような面もある会であること

ご挨拶

母校創立 140 周年記念
事業実行委員長／
東京桑野会副会長
和田　正哉（77 期）

東京桑野会会員諸氏には、日頃より何かとお世話になっており、誠に有難うございます。

ご存知の通り、2024年９月11日に我母校は、創立140周年を迎えます。2025年４月には、中学・高校の一貫教育校に指定され、安積高校に県立安積中学校が併設されて又輝かしい歴史の一ページを作ります。

創立140周年記念事業では、色々な企画を進めており、本年６月14日の記念総会・式典（人数に制限があります）には是非参加して頂きたく御願い申し上げます。

東京桑野会も150周年に向かいこれから幾多の改革、イノベーションが必要かと感じておりますので、会員諸氏の多大なるご協力を重ねて御願い申し上げましてご挨拶とさせて頂きます。

東京桑野会2024（令和6）年度定期総会・母校創立140周年記念式典のお知らせ

今年は、母校創立140周年記念の年です。東京桑野会では下記の要領にて式典を実施します。会員の皆様は、万障お繰り合わせの上ご出席賜りますようお願い申し上げます。

期日　令和６年６月14日（金曜日）

時間　17:00　受付開始
17:30～18:00　令和６年度東京桑野会定期総会
18:00～19:10　母校創立140周年記念式典
　18:00～18:10　来賓紹介
　18:10～19:10　記念講演　横浜市立大学名誉教授　矢吹晋（70期）
　数奇な入来文書の運命～朝河史学はなぜ忘れられたか
19:10～21:00　祝賀会

場所　目黒の『ホテル雅叙園東京』、３階宴会場『シリウス』
東京都目黒区下目黒１－８－１、電話　03－3491－4111
目黒駅（JR山手線西口、東急目黒線、地下鉄南北線・三田線）より権之助坂を下って徒歩５分。
行人坂を下って徒歩３分。

会費　学生（院生含む）　無料
120期以降　5,000円
119期以前　10,000円

注意　着席でのコース料理のため120名様限定となります。先着順で受け付けます。
なお年会費は上記の祝賀会費とは別に、一律2,000円を徴収します。
同封の振替用紙をご利用の上、祝賀会費と年会費の合計金額でお支払いください。

☆母校は今年（2024年、令和６年）、創立140周年を迎えます。その母校の現在の様子を、母校からの情報をもとに紹介いたします。
☆2023年５月に、新型コロナウイルス（COVID-19）が第５類に変更され、コロナ禍からの復活の１年となりました。その端緒の様子は、2023年度の東京桑野会総会・懇親会でも、母校学校長や校内桑野会幹事長の来賓の方々から、詳しく報告して頂きました。東京桑野会会員の皆様、是非、2024年度の総会・懇親会に足を運んで頂き、母校の様子を地元・郡山からの来賓の皆様から、直接お聞きして頂きたく存じます。是非、総会・懇親会へ！
☆何といっても、母校140周年を迎える母校の大変化は、中高一貫校化でしょう。
昨年、新中学校棟の建設が始まりました。桑野文庫（図書館）、家庭科室、駐輪場の跡地で、完成すれば、３つの校舎が同一敷地内に同居する、面白い絵になると想定されているとのこと。
☆是非、そのお話も総会・懇親会で伺いましょう！

会員消息

物故者指名

氏名（敬称略）	期
青山　八郎	55
安藤　義和	58
高松　義明	58
増戸　正	59･60
竹本　信雄	59･60
松津　皓也	63
渡邉　太郎	63
吉田　勉	63
宗形喜久男	64
山本　薫	64
遠藤　實	64
樽川　満	65
相楽　寿男	65
天野　仁	66
渡辺　光健	66
夏井　亮	66
三嶋　友安	67
湧井　祐紀	67
鏑木　舜	67
渡辺祐次郎	67
阿部　功	67
太田　孝則	68
中村　七男	68
西牧　耕造	68
大和田正義	69
柳沼　亨	69
渡野辺　武	69
小黒（旧姓　本郷）邦雄	70
宗像　秀夫	69
伊藤　伸一	71
加茂　誠一	72
田中　勝治	72
森合　昭男	76
草野　幸次	77
矢吹　次男	78
川崎　良雄	79
澤田　寛	80
橋本　和春	81
高坂　彰	83
遠藤　実	87
富田　公章	89

令和５年度に連絡を頂いた方の分を掲載いたします。

会長メッセージ

東京桑野会会長
浅川　章（76期）

我らが母校･安積高校は､1884年（明治17年）福島県福島中学校として創立され、本年140周年を迎える。爾来、36000有余の人材が県内外をはじめとして国際的にも活躍するなど輝かしい歴史と伝統を築いてきた。創立以来の伝統とされるのは開拓者精神である。

校舎は福島県中央の安積郡の一寒村だった桑野村に建設された。学校の周囲は桑畑が連綿と広がり、彼ら中学生の健児たちは戊辰戦争の傷跡から懸命に立ち直らんと苦闘する県民や、没落士族によって建設された安積疎水に象徴される安積地方の開拓の姿を見て開拓者精神を身に着けていった。人々もまた、荒廃の中から復興の担い手となる人材の育成に希望を託した。彼ら中学生は厳しい環境の下、校舎、運動場などを整備しながら開拓者にならんと固い決意のもとに勉学に励んだに違いない。その中にひときわ向学心に燃える少年がいた。少年は安積中学を首席で卒業し、東京専門学校を経て太平洋を渡った異国の地に学び、国際的な歴史学者として活躍した。昨年、生誕150年を迎えた朝河貫一博士である。

今日、開発の波は５大陸の隅々にまで及んでフロンテアはほぼ消滅したとされる。

翻って、現代社会には未開拓の不気味な荒野が出現した。地球を覆う気候危機、戦争、感染症などである、2023年は年間を通して地球の平均気温が観測史上最高を記録し、国連事務総長は「地球崩壊が始まった」と言明した。こうした巨大な荒野に対して、その病根にメスを入れ、人文・自然科学の鋤や鍬を持って敢然と立ち向かう開拓者の出現が待たれている。安積健児の中から開拓者精神に溢れて勇躍、隊列を組んで陸続と広大な荒野に入っていく群像を想像することは愉快である。

一世紀半になんなんとする安積の歩みを顧みるとき、21世紀の幕開けの2001年は歴史に刻まれるべき年となった。一つは野球部の甲子園初出場であった。新設の21世紀枠での待望久しき甲子園出場は正に文武両道の証であった。アルプス席を埋め尽くした6000人のOBが大声援を送り、アルプスに陣取った一人としてその地鳴りのような響きは今も耳朶に残っている。対戦相手は石川県の金沢高校で、健闘及ばず１－５で敗れた。

もう一つは男女共学がスタートしたこと。男女共同参画社会の推進という時代の流れに沿った改革で新たな一歩を踏み出した。順調に20余年を経過し、定着した。この際、東京桑野会の活性化の方策として、共学化以降の各期幹事は男女各１名として、明文化し、確立したい。女性幹事には総会や幹事会をはじめ諸行事の活性化のパイオニア（開拓者）として参画されるよう大いに期待している。

首都圏を中心に内外で活躍している安積のOB・OGの皆さん、特に中堅・若手の諸君、まずは、東京桑野会の刷新され、リニューアルしたホームページを参照あれ。そして、６.14には新しい総会会場になった目黒雅叙園に集い、共に校歌を斉唱し、母校140周年記念の総会を盛大に祝おうではないか。

ご挨拶

安積桑野会会長
笠間善裕（84期）

東京桑野会の皆様には、日頃より安積桑野会の活動に対し、ご支援、ご協力を頂き、誠に有難うございます。

私は、昨年９月の安積桑野会総会において、８年間会長を務められた安孫子健一前会長の後任として会長に選任されました。微力ではございますが、精一杯、楽しくその責めを果たしたいと考えておりますので、引き続き、安積桑野会に対し、ご支援、ご協力を頂くことをお願い申し上げます。

さて、我らが母校安積高校は、本年４月に新１年生が第140期生として入学し、９月11日には、創立140周年を迎えます。既にご存知のとおり、来年（令和７年）４月には、県立安積中学校（１学年、30名のクラスが２クラ

故郷を味わう、故郷に触れあう

そば　うどん　酒処

鞍手茶屋

昼はボリュームたっぷりで
ヘルシーな そば・うどん
夜は品揃え豊富な
東北の地酒で 一杯

大手町店　〒100-0004　東京都千代田区大手町1-1-3　大手ｾﾝﾀｰﾋﾞﾙB1　☎03-3213-2385
中山峠店　〒963-1304　福島県郡山市熱海町国道49号線中山峠　☎024-984-3774　〈店主〉上野千恵子

ス合計60名）が中高一貫校として併設開校予定であることから、創立140周年記念事業を令和７年に行うべく、昨年12月第１回準備委員会を開催致しました。在校生の人生の糧となるような記念事業にしたいと考えて進めております。なお、現在、中学校校舎建設が旧本館南側にあった図書館（桑野文庫）を取り壊した跡地に進んでおります。

さらに、これも既にご存知とは思いますが、令和３年及び同４年の福島県沖地震により被災した旧本館について、所有する財団法人安積歴史博物館において、保存修理工事とともに耐震補強工事を実施することとしたことから、安積桑野会においても、昨年総会において、同工事事業に全面的に協力することが決議されました。これを受けて、郡山市内の各経済団体及び安積高校関係団体で構成する「旧福島県尋常中学校本館保存修理工事実行委員会」（会長は、安孫子健一安積歴史博物館代表幹事）を組織するとともに、安積桑野会においても、12月４日に臨時常任幹事会を開催し、各期ごとに募金活動を開始致しました。

51期の先輩が創立100周年にあたり寄せられた「安積高校百年祭」と題する七言絶句の一節に「伝承本館校風香」（本館を伝承して校風香し）とありますように、安積精神（質実剛健、文武両道、開拓者精神）の象徴である旧本館を今後長きにわたり保存活用できるよう、東京桑野会の皆様には、ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

お願いのご挨拶となってしまいましたが、東京桑野会の益々のご隆盛を御祈念申し上げご挨拶とさせていただきます。

ご 挨 拶

安積高等学校　校長
鈴木芳人

会員の皆様には、日頃より母校に多大なる御支援を賜りますこと、感謝申し上げます。

明治17（1884）年、福島県福島中学校として発足しました本校は、令和６年９月11日をもって創立140周年を迎える運びとなりました。明治22年に、現在の福島県庁付近に存した校舎から、当時の安積郡桑野村に建設され「桑野御殿」と称された新校舎に移転。以来、安積は、明治・大正・昭和・平成そして令和へと時代が移る中、制度の変更による校名変更や、戦時下の教育から戦後民主教育への転換、21世紀を迎えた平成13年（2001）の男女共学化、平成23年３月に本県を襲った東日本大震災・東京電力福島第一発電所事故の経験など幾多の変遷・歴史を積み重ねながら、県内最古の中等教育機関として、140年の長きにわたって本県教育の先導的役割を果たしてまいりました。安積の精神「開拓者精神、質実剛健、文武両道」は、先輩から後輩へと継承され、母校を巣立った35,000名を越える有為の優れた人材は、社会の各分野各層で名を残し、あるいは現に活躍されているのは皆様ご承知のとおりです。

一口に140年と申しますが、安積の持つ歴史の重み、母校に過ごされた方々の想いの重みには、我々を圧倒するものがあります。日本の近代化と共に歩んだ安積の歴史は、同時にいつの時代にも若者が持つ苦悩によって形作られてきたものでありました。友と肩を組み「嫩草萌ゆる」を歌いながら、真の自分を探して安積に学び、やがて事をなすために志高く巣立っていった諸先輩の想いこそが開拓者精神である。この事は、校長として、東京桑野会を始めとする全国各地の桑野会員の皆様とお目にかかり、改めて確信するところです。

創立130周年からの安積の10年間を象徴するものとして、令和の新時代と軌を一にスタートしたスーパーサイエンスハイスクールへの取組が挙げられます。これは、大震災からの復興途上にある「ふくしま」で、高校生の学びをとおして復興の一翼を担うことを企図し、「安積の開拓者精神を世界へ」広めることを目標としており、国内は勿論、海外の高校生との交流なども積極的に行っております。中でも新しい学びの姿である生徒の探究活動に、各界で活躍されている先輩方の力をお借りするシニアサポーター制度は、他に類をみない試みであり、全国のSSHに取り組む学校からも注目を集めております。

その一方、これも新時代への不安を具現化するかのように、新型コロナウイルス感染症が安積を襲いました。令和元年度末から２年度当初の約２ヶ月にも及ぶ臨時休校に始まり、修学旅行を始めとする学校行事･部活動の大会･コンクール等の中止など、本校のみならず全国の高校生が、否応なく感染症対策の名の下、コロナ禍の嵐の中で制限された学校生活を強いられました。そんな危機の時にも、安高生らしさを失わず、「修学旅行にも行けず、可哀想って周りは言うけど、他の代ではできないこんな貴重な体験できたのは、私たちだけだよ。」の言葉を残して笑顔で卒業していった卒業生諸君には、質実剛健の何たるかを学ばせていただいた気がいたします。

さて、令和６年１月、令和７年４月に開校する安積の併設中学校の名前が、県教育委員会より公表されました。申し上げるまでもなく、「県立安積中学校」であります。創立140年の歴史の重さを感じつつも、安積は常に150年、200年の時を経た未来を見据えながら、「七州の覇」と称えられるに相応しい次なる姿を目指して、前に向かって歩んでまいります。教職員、在校生を代表して、このことを東京桑野会の同窓生の皆様を始め、安積を支援していただいている全ての皆様にお誓い申し上げ、ご挨拶といたします。

安積高校創立 140周年記念について

東京桑野会副会長
和田 正哉（77期）

今年９月に我母校は、創立140周年を迎えます。

昨年の７月頃より、まず会場を何処にするかという事が、役員会・幹事会で議題にあがりました。例年だと椿山荘が会場になるはずでしたが、この２～３年椿山荘さんから会費の値上げを申し入れられていましたが、椿山荘さんのご好意で、（少し会費が上がりましたが）去年までは、行ってきました。さすがに今年は、例年の値段では出来ないという事で、椿山荘さん側からお断りされ、会場探しになり、色々候補選びを行い、最終的に「上野精養軒」と、「目黒雅叙園ホテル」に絞られ、「目黒雅叙園ホテル」に決まりました。次に記念式典講演会の講師の選定の課題です。役員会・幹事会では、喧喧諤諤議論をし合って、10名ほど講師候補者の選定をしました。

歴史と伝統を誇るわが母校には、人文・自然科学の分野における学者や司法・行政の分野、文学界、芸術界、放送界などの各界に渡って活躍される錚々たるOBが、綺羅星のごとくおります。

私たちは、選定した候補者に、一斉に連絡を取りました。その中で、早期に快諾された方が、横浜市立大学名誉教授の矢吹晋先生（70期）です。これにより、講師は決定しました。私たちは、先生のご講演に大きな期待を寄せるものです。

140周年の記念の会報を今年は24頁に増刷する予定の為、原稿の寄稿者を、実行委員会でも15名以上集めることになり、浅川会長、首藤（80期）、石井幹事長（82期）、和田（77期）４人が定期的に（月最低２回以上）集まり協議してきました。私は個人的にも２～３人ごとの違うメンバーにお会いして、寄稿のお願いをしてきました。何とか15人を確保できた事、嬉しく思います。その他記念品の選定、当日の式の運営（当日の催し等）等色々やる事がありましたが、皆様のたくさんのご協力を得て、最低限の事はできたかなと思いますが、まだまだ充分とは言い切れないと思っております。

次は、我母校の150周年に向かって東京桑野会の運営等について、提案をして、後輩の皆様にも一緒に考えて頂きたいと思い、一筆を書かせてもらいます。

第一は、役員会･幹事会の若返りと、活性化の問題です。このテーマは、どこの高校の同窓会でも（福島県人会も同じ悩みです）抱えております。私共、東京桑野会も、高齢化が進んでいますので、手始めに各年代の幹事を各２名ずつおく（特に100期以降、これは少しずつ始めております。）それと150周年に向けて、役員は、将来75歳以下とし（会長は別として）75歳以上は常任顧問とする事を提案したいと思います。東京桑野会の年代の中には、２次会を総会後に行い、総会には出ないが、２次会には出席する人もいると聞いておりますので、もっと会の活性化の為の方策を皆で考えて提案して頂きたいと思っております。

第二は活性化の為の一つとして、各イベントの交流を復活と新設を行うべきと考えます。①囲碁の同好会（今迄は故高松（74期）先輩が幹事長）②ゴルフ同好会（和田（77期）が幹事長）③年に１～２回の旅行（毎年９月に八ヶ岳で有志による一泊旅行を行っていた）①②③の復活、新設として将棋同好会は既に進めております。その他新しい企画で同窓生が集える会を新設する。以上些細ではありますが、150周年に向けて東京桑野会の役員間では若返りと活性化を行っていかないとジリ貧になってしまうという危機感があります。私も含め役員も高齢になってきていますので、100期以降の皆様には特に役員・幹事会に入って頂き、又会員の皆様には、役員の高齢化を防ぎ、また活性化する為の方法、成功例、ご意見等を頂きたいと思ってお

技術と奉仕の無線機器部門
ソフト開発と奉仕のコンピュータ機器部門
ニーズに対応、奉仕の電話機器部門
株式会社富士通ゼネラル 通信特機特約店
富士通テン株式会社 特約店

不法電波は
やめましょう！

ATIS（自動識別装置）を
必ず取り付けましょう！

株式会社 山口電機
www.yamaguhi-denki.co.jp

本社	宇都宮市宮の内2丁目184番地18	TEL(028) 655-1600(代表)・FAX(028) 653-7817
水戸支店	水戸市中河内町67番地1	TEL(029) 227-2205(代表)・FAX(029) 227-2237
さいたま支店	さいたま市三橋1丁目815番地	TEL(048) 663-4000(代表)・FAX(048) 663-4274
東京支店	江戸川区春江町2丁目10番3号	TEL(03) 3698-1600(代表)・FAX(03) 3698-1699
千葉支店	千葉市稲毛区六方町215番地22	TEL(043) 423-3000(代表)・FAX(043) 423-3503
高崎支店	高崎市倉賀野町5319番地1	TEL(027) 346-4000(代表)・FAX(027) 346-4004
会津若松支店	会津若松市一箕町八幡38番地11号	TEL(0242) 23-1700(代表)・FAX(0242) 23-1701
横浜支店	横浜市青葉区元石川町3719番地8	TEL(045) 921-5100(代表)・FAX(045) 921-5416

代表取締役　山口雄機（74期）

ります。
この原稿を書いている折にも、毎日能登半島の地震情報が伝えられております。亡くなられた方々、又被災された方々には、心よりお悔やみを申し上げると共に、一日も早い復興を願っております。
今後とも東京桑野会が発展する様に、ご意見並びに行動する事をお願い申し上げます。

母校の中高一貫校化への期待（座談会）令和６年１月13日実施

〈司会・渡部良朋（91期）、以下司会〉
母校・安積高校は今年創立140周年を迎えます。そして、安積高校創立141周年となる令和７年度に福島県立安積中学校が母校に併設されます。そこで、創立140周年記念の東京桑野会会報において目玉として「母校の中高一貫化への期待」として座談会を企画いたしました。本日は86期から127期まで、約40年に渡る世代から７名の参加を得て実施できることになりました。ご参加の皆様には大変に感謝いたしております。
安積の中・高一貫校化は、福島県のトップエリートを集めた中等教育の実践として、大変に期待が高いのですが、過去に福島県のトップエリートを集めた英才教育の取り組みが安積高校でありました。それは、1968年･84期から始まる「理数科」でした。理数科の初期は、素晴らしい大学進学実績を残したこともあり、「福島県のTopフォーティ」とも呼ばれました。そののち、90期位から調子が良くなくなり、2000年３月に閉科いたしました。この歴史の原因について考え、新制安積中学校・高校が真に地元・福島県の期待に応える存在となるには、どのような要件が必要かを議論したいと思います。
では、まず、参加の皆様から、自己紹介をかねて簡単に「今まで何をやってきたか・今何をやっているか」をお話し頂けると幸いです。また、出身小学校・中学校も教えて頂ければと存じます。
〈秋田調氏（86期）〉
86期の秋田調と言います。出身は、三春小学校・三春中学校です。理数科の３期生（※86期相当）です。卒業証書の番号ですが、私は「あ」から始まる名前なので、理数科の卒業生通算番号が２ケタでした。３期生がどんな感じだったかというと、学区は全県一区で遠くから来ていた生徒もいました。どんな進学状況だったかというと、東京大学へは、現役合格・進学が２名、浪人後進学が４名でした。医学部進学が、東北大学や福島県立医科大学を含め12名位いました。その理数科クラスが、東京にあった学校のクラスとしても相当のレベルであったと思います。なぜ、そんなに人が集まったかというと、理数科が３・２・１学年（84期～86期）と充足してきて、結構すごいらしいという評判が高まってきたこともあるかなと思っています。３年間一緒のクラスだったので、いまでも仲が良くて、毎年同級会をやっています。団結力が強いです。
何をやって来たかというと、東京大学を出て電気物理の修士課程を修了してから研究所に入りました。入った研究所は（財）電力中央研究所でして、電中研には安積の出身者が私を含め、３人おりました。50歳位までは研究もやっていましたが、その後は研究所のマネジメントをやらされるようになり、最後は専務理事を務めました。退任後は、名誉特別顧問という名刺を貰っていますが、要は無給です（笑）。年金生活者として楽をしていたのですが、昨年の７月から、福島県・浪江町に設立された特殊法人「福島国際研究教育機構」のエネルギー分野の副分野長を拝命しております。エフォートは40%にして戴いておりますが、ほぼ毎週、浪江に通っております。

〈西田幸雄氏（91期）〉
91期の西田です。私の時代は、理数科の転換期だったのかと思います。私が１年生の時の３年生（89期）の実績は、クラスで中位の成績の人が現役で福島県立医大医学科に合格したということがありました。他にも、普通科の平均点が45点の試験で、理数科が67点という、まるで別の学校の

令和6年 安積高校創立140周年おめでとうございます

ウインファーマグループはお陰様で創立25周年

ウイン薬局

～ 人と人のつながりを愛します ～

地域密着したかかりつけ薬局を目指します

首都圏･関東･福島県関連薬局 65店舗

【保険薬局：処方せん受付･医薬品･医療用品･インターネット販売】
ウインファーマグループは創業25年　安心･安全･信頼を築き、
心を込めて調剤します。　代表　藤田　勝久（82期）

ような成績をとっていたというようなこともありました。

理数科の成績が急にダウンしたというのは、学区の変更の影響もあったと思います。全県一区を改め、学区を狭めた結果、遠方からこなくなって、近場の中学生が損得で普通科を選ぶようになった、というのがあるかと思いました。

私は安高のお膝元、開成小学校・郡山一中の出身でした。当時は一学年430人前後ののマンモス校で、（男子校である）安高は同学年の90人が受験して55人合格、35人は不合格。不合格者のうち10名位は中学浪人をして安高に入学しました。当時は、磐城高校の中学浪人が有名でしたが、安積も福島高校も中学浪人が大問題でした。安高も一クラス５～６人の中学浪人がいましたね。93期相当から、郡山高校が新設されたので、安高の合格ボーダーラインの生徒を吸収する形となったので、浪人問題は軽減されましたが、当時の高校入試は問題が多かったですね。

私自身は、高３時点は理系で、数Ⅲも物理Ⅱ・化学Ⅱもやりました。卒業後文転、１浪して中央大学法学部法律学科に進学しました。司法試験を目指し３浪するもかなわず、26歳時点で公務員か新聞社くらいしか正規の就職口がない状況で、読売新聞社に拾ってもらいました。定年まで読売新聞社にいて、その後はシニア嘱託で継続して働いています。現在は、読売新聞の戦略の視点から「活字文化を守り抜く」「未来読者の育成」を目標に、「NIE」活動の一貫で新聞から情報を正しく読み解く検定試験などの事業・活動に係っています。今の時代、スマホやネット依存により情報偏食の人やフェイク情報に振り回されている人が増えているという危機感を抱いています。

〈司会〉西田君は、持っている情報の多様さ、情報のつかみ方がすごいといつも敬服しています。それは、西田君の経験や安積での学びの影響が大きいと思っています。実は、今回の座談会は、その内容や出席の皆様を、東京桑野会の皆様のみならず、母校の後輩、母校の先生方さらには生徒の保護者の方に知っていただきたいと思って企画しております。安積というのは、こんなに多様で深い人材を世に送り出しているんだよ、と。

〈塩谷格氏（98期）〉

では続いて98期の塩谷格です。出身は桜小学校・郡山第三中学校です。自己紹介の前に、今、秋田先輩、西田先輩のお話を聞いて、質問をしたいと思いました。理数科の成績が段々に低下していった原因が学区変更の影響？（学区変更も一因？）との考察がありましたが、生徒の出身地域の大勢が変わっていたのでしょうか、それとも他に理由はあったのでしょうか？

〈西田〉一因で、すべてではないとは思います。他の理由としては、学習指導要領の改定もあったのではないかと思います。秋田先輩のころは物理Ｂとか化学Ｂという名前だったと思いますが（秋田氏、頷く）、我々91期の頃は物理Ⅰ・Ⅱ、化学Ⅰ・Ⅱになった。理数科は生物・地学・物理・化学のⅠ.Ⅱの全科目が必修だったが、普通科は理系クラスでもⅡまで取るのは２科目でした。

理数科は数学・理科の全科目履修するために、他の教科の時間が減った。体育は普通科の半分くらい。男子高校生が、体育の時間を減らされて、どうストレスを解消せよというのか、と思います。

〈司会〉そのような情報が中学校に伝わっていって、理数科が敬遠されるようになったのもあるんでしょうね。

〈秋田〉我々は世界史をやっていないんです。今、考えると、ちょっと･･･。

〈塩谷〉過去の経験を整理すると、中･高一貫に活かせる部分は大きいと思いました。

で、私自身のことですが、安高卒業後、一浪して、東北大学農学部へ入学しました。今、株式会社ニッスイ（旧･日本水産株式会社）に勤務しています。ニッスイは水産の名前が付いていますが、水産よりも食品の売り上げが現状では多いです。私は大学時代は畜産をやっていて、動物の解剖の勉強とかをやっていました。生物を扱える／対象とする仕事につきたくて、いろいろな人に相談してニッスイに入りました。就職活動のころはバブル経済に日本が湧いている時期で、仙台から東京に面接に来る時も旅費や宿泊費を貰えるというような経験をしました。ニッスイに入った後は水産の研究をずっと行っており、大分の研究所などを経て、現在は八王子のニッスイ中央研究所の所長をしております。中央研究所では、水産・食品・医薬品の研究をしていまして、自分はいまは多くの部下の仕事がどうすればうまくゆくかな、という應援團のような仕事をしています。

高校時代、成績は悪かったので、勉強に関してどうのこうのは言えないのですが、ただ、安積の３年間、歴史と伝統、多様な卒業生、バンカラな校風など心に深く刻まれており、安高で学んだ誇りというのは、卒業後にも強く感じるようになりました。（司会からの事前質問で）高校時代にくだらないと感じた経験はあるか？という質問があったが、私は良い意味でくだらないことを自由にやれたことは良かったと思っています。生徒がやりたいことを、節度をもって許容する、そういった校風が今もこれからも続いていくことを願っています。

〈司会〉私の自己紹介の番ですが、私からは91期の担任であった穴澤久作先生の言葉を紹介したいです。卒業アルバムに穴澤先生の言葉が一言、「無駄の効用を知れ」。穴澤先生は、既に鬼籍に入られ、私も穴澤先生が担任をしてくださった時の年齢を大幅に超えましたが、その言葉の意味が自分の人生と照らし合わせ意味が分かるようになりました。

〈塩谷〉当時の地理の吉田宏先生が言っていたことですが、鹿児島の鶴丸高校（旧・鹿児島一中）と安積高校を比較して言った言葉が印象に残っていて、鹿児島県民は誰か伸びる人がいるとヨイショしてついていくんだけど、福島県民は誰か伸びるやつがいると皆で足を引っ張る。そうならないようにしないといかん、と。印象に残っています。

〈安孫子哲教氏（115期）〉

115期の安孫子哲教です。小山田小学校／富田西小学校・郡山第六中学校の出身です。安高３年生の時、女子の第１期生が入ってきた、歴史的な時代の期です。私も理数科で数学がとても好きで、国語と社会がダメでした。化学・物理を選択して勉強していたのですが、自分がどういう道に行きたいかというのがつかめなくなって、その時に何か人のためになる仕事をしたいと考え、文系ですが弁護士になりたいと思うようになりました。文転したけど、国語と社会ができない（苦笑）ということ一浪の後法政大学法学部法律学科に入り、その卒業後法科大学院に入り、紆余曲折があったのですが司法試験に合格して、今は弁護士として仕事をしております。

安積高校は、私にとって、自由な学校だったなと思います。いろいろな生徒がいて、いろいろなことをやっている。自分も部活（演劇部）を自由にやった。（未来の）安積の生徒に伝えたいことは、安積を好きになってもらいたい、ということです。すごい先輩も多くいるし、自身にとって、可能性を広げることができる学校さと思うからです。

〈秋山綾子氏（119期）〉

119期の秋山綾子です。出身小学校・中学校ともに喜多方（市の学校）です。学区外だったのですが、高校教員の両親が郡山市に転勤ということで、安積高校を受験することが出来ました。共学の３期生で男女共学が完成した年の入学です。男子校だったという気配はあったのですが、中学校も共学で高校も共学ということで変わらない楽しい共学生活でした（笑）。

小学校は小規模校で、全校生徒36名、同級生が８名でした。中学校は、喜多方第三中学校で４クラスでした。もっと広いところに行ってみたい、自分も高いところでチャレンジしたいということで安積高校を受けました。

私は高校２年生の時、SSHクラス（※SSH：スーパーサイエンスハイス

クール）に属していて、体育も美術も音楽も時間数は半分、その代わりにSSH授業（理数系の科目）を受けました。SSHの研究では、人間の刺激に対するホルモン生成反応を調べたりして、普通の高校生ではできない経験を得ました。自分たちで分からないところは、東京大学の教授に連絡を取って、指導を受けたりしました（他一同、すごいな・・・）。

大学は金沢大学医学部保健学科に進学しました。理学療法士になろうと思ったのですが、大学３年生の時、兄が心臓疾患で亡くなったため、大学での専攻を決める時期でもあり、循環器を専門とする分野へ方向転換しました。心臓を元気に保つためにはどうするか、というようなことを考え、卒業後は北里大学大学院でさらに勉強をすすめました。その後、大学病院に６年間勤め、心臓疾患のリハビリテーションを担当していました。現在は、（一社）ポジティブヘルス協会を設立し、社会教育・会社での研修などを実施しています。高校時代に医学部医学科を目指しましたが、数学と物理・化学の成績が医学科合格までは届かず、医学部保健学科に進みましたが、その後の紆余曲折を経て現在に至っています。安積の開拓者精神にのっとり、自分の道を作ってきました。

～《SSHクラスに関して、種々、質疑応答》～

〈遠藤祐太朗氏（127期）〉

127期の遠藤祐太郎です。大島小学校・郡山第五中学校の出身です。小学校４年生でソフトボール、中学校からクラブチームで硬式野球を始めました。祖父が66期、父が96期で野球部でした。子供のころから、開成山球場に、安積高校の野球部の応援のため連れて行かれ、安積高校野球部に憧れるようになりました。ほぼ、洗脳だったと思います（笑）。頑張って勉強し、安積高校に入学し、野球部に入りました。野球漬けの高校生活でした。最後の夏は、日大東北高校に敗れて、終わりました。

敗れたあと、さてどうするとなりました。2013年当時、東京オリンピックの開催が決まり、世間は盛り上がっていました。それまで、野球に明け暮れていたが、その過程でスポーツの怪我への対処法や技術的な指導法について、それまで受けていたものよりもっと深く学びたいと思うようになり、そのような勉強ができる大学はどこだろうかと調べた結果、早稲田大学スポーツ科学部に行きました。一浪の後、早稲田大学スポーツ科学部に合格することが出来ました。大学に入ってから、多くの専攻からスポーツビジネスの分野に興味が湧き、それを選び勉強しました。

今、何をやっているかというと、富士通株式会社で営業をやっています。スポーツ関連の情報システムを扱う部署です。新しいシステムを来年3000店舗に導入する計画があり、大変に忙しく仕事をしています。スポーツビジネスに係る分野で仕事が出来ていて、とても充実しています。

〈司会〉皆さんのお話をお聞きして、展開力がすごい、と思わざるを得ません。スゴイ・・・。

〈司会〉出席の皆さんで、さらにお話ししたり、相互に質問したいということがありましたら、お願いいたします。

〈秋田〉安高時代の特別な経験として、１年生の夏休みに東京教育大学（現筑波大学）の下田臨海実験センターにおいて実習を受けたことがあります。松本敏則先生（東京教育大学出身）がアレンジしてくれたと記憶していますが。そこで、ウニの受精の実験・観察をさせて貰った。他にも海生生物の採取や観察もさせて貰った。あれは大変に印象的な経験でした。先ほどの秋山さんのSSHクラスの話ありましたが、皆さんは、安積でそのような経験はありましたか？

〈秋山〉２つあります。SSHクラスで、みんなでバスで東京大学のキャンパス見学に行きました。日本で最高峰と言われる大学のキャンパスを、クラスの仲間でワイワイと見学できたのは、SSHならではことだったと思います。もう一つは海外研修です。上海とかアメリカとかに２週間程度研修で行けたというのは、そういうプログラムが学校で準備されているということで、保護者にも安心できるものだと思いました。安積高校のオフィシャルとして、そのようなものが準備されているとしたら、もし私が今、小学校６年生や中学校３年生だとしたら、安積中学校や安積高校に行ってみたいと思うだろうと感じます。また、私の友人も上海に研修で行ったあと、大学は富山大学に進学しその後上海大学に留学し、現在は外資系の企業で海外生活を送っている人がいます。

〈秋田〉最近の新聞に書いてあったことですが、関東圏とその他の地域で一番違うのは「経験」だということでした。郡山にいるとあまりいろいろ経験はできないが、安積中学校に入ったら関東圏と同じ経験が出来る、となればそこだけで人生、結構な差が付くということになるのでないでしょうか。

〈司会〉先ほどの東京教育大学　下田臨海実験センターの話ですが、この施設はとても有名な施設で、松本敏則先生が大学に話を通して研修をさせて貰ったということを聞いています。ただ、90期の時に、レベルが芳しくない生徒がいて、91期は取りやめになったということも聞きました。私の同期でも、それがやりたくて理数科に入ったのに、入ってみたら取りやめになった、そんなの有りかよ、とすごくがっかりしていた人がいました。

母校の先生方の持っている力というのは、実は、すごいものがあります。いろんなところにコネクションを持っていて。そういった先生方が、安積にいる、というのがとても重要なことと感じています。

〈秋山〉安積を卒業した先生が、出身大学や他校での経験を母校・安積に持ち帰り、強い思い入れを持って教育にあたっているというのが、大きな特徴だと思います。喜多方ではそういうことはありませんので。

〈秋田〉高校時代に残念だったこと、ということでは無いのですが、三春と郡山を往復する生活では、英語に触れる機会がほとんどない、後から思いました。高校時代、英語の成績がめちゃくちゃだったので、大学合格を報告にいったら、良くあの英語の成績で入ったなと担任の先生に言われました（苦笑）。安積中学の生徒さんには、英語の経験を多く積む場を多く設けて欲しいですね。

〈秋山〉郡山ってインバウンドの訪問者が少ないですね。郡山の魅力を伝える機会を、高校生で英語で発信してもらう機会を設けるとか。学校だけではできないと思いますが、機会創出を図ることができないものでしょうか。

〈秋田〉昨年９月　ホテルはまつを会場に、RG20というG20の研究開発の関係者の会議がありました。私はそれに参加していましたが（皆にスマホの写真を見せる）、これは郡山に産業技術総合研究所　福島再生可能エネルギー研究所（AIST FREA）や浪江に水素の研究拠点があります。その関係で、郡山で国際会議が開催されました。そんな国際会議に、安積中学校の生徒がアテンドするような機会があったら、大変に良い機会になるのではないかな、と思います。

〈司会〉そんなことが出来たら、すごいモチベーションになりますよね。

〈司会〉今までの話を聞いて、皆さん安積高校に入学するにあたって、親や地域の期待というものがあったと感じました。それを踏まえて、“もし出身小学校の後輩が新設安積中学校に入学したら、どのような中学校生活に取り

上段左より：渡部、塩谷、安孫子、遠藤
前列左より：秋山、秋田、西田

組んで欲しいか”、そして“（新設安積中学校に進学せず、）３年後に出身中学校から安積高校へ進学する後輩がいたとしたら、その後輩にはどのような言葉を贈りたいか”、ということをお聞きしたいと思います。
〈塩谷〉安積中学校は、福島県立医大医学科への合格者・進学者を増やすために作った、という話を聞いたが、そうなんですか。
〈司会〉そうだと思います。県教育委員会の資料では、ちょこっと、医学部医学科への進学者を増やす、ということが書かれていますが、実はミッションはそこにあるということを色んな人から聞いています。なぜかというと、福島県立医大医学科への進学者で福島県出身者の占める割合が低いのです。東京の中高一貫校に荒らされているのが現状です。そのような出身者は福島に残らない。
〈司会〉秋田さんや私が勤務していた電力中央研究所は、その研究員の出身校を調べると全国の名門進学高がずらりと並びます。研究員には、恐ろしく頭がいいなという人が、何人もいます。その人たちの話を聞くと、学校時代は本当に自由に熱心に、勉強や部活、学校行事に取り組んでいたようです。
〈秋田〉私は、電力中央研究所時代、職員採用の責任者でしたが、研究員採用の際に見るのは成績表ではなく地頭の良さでした。そうでないと研究者として伸びない。いくら良い成績表が付いていても、話をすると能力はすぐに分かってしまう。だから、電中研は変な集団になってしまう（苦笑）。
～《中学校・高校のクラス編成のやり方について、種々、質疑応答》～

〈西田〉県は、少子高齢化の進行と県人口が2050年には2022年の68％まで減少の予測で、医療従事者確保が急務だと。いろいろ学校は考えているようです。深堀学習を中心に据るなど。
〈秋田〉医学部医学科への合格者・進学者を増やしたいと思いは理解するが、もうちょっと大きな希望を持って欲しいなと思います。郡山を中心とした福島県央はどこか大陸的な雰囲気を持つ地域で、突出した能力を持つ人間が出てくるところだと思っています。だから、安積中学校の生徒には、県立医大医学科位は入ってね、というような気持ちで見守りたいです。
〈一同〉（頷く）
〈遠藤〉今、私が小学生だったら安積中学校を目指したいと思います。安積高校に学んだから、今の自分がいると思っています。中学生や高校生が周りから受ける影響はとても大きいです。小学生で、自分の将来を考えている人なんて殆どいないと思います。中学校で経験することについても、教科書を勉強しているだけでは深堀学習などあまり期待できないと思うけど、学校の外に出ていろんな経験ができれば視野が広がってくると思います。それが自由にいろんなことが出来る安積中学校には、期待できると思います。
〈塩谷〉母校の先生や我々OBが、そういったことに寄与できると良いですね。
～《中学校の選別方法について、種々、質疑応答》～
〈秋山〉安積は、おもいきり自分でいられる環境だよ、と伝えたいですね。

〈司会〉本日は、長時間に渡り、ありがとうございました。では、会報の出版をお待ちください！

中高一貫校の歴史的経緯と意義について

渡部 良朋（91期）

１．はじめに
令和６年、母校・福島県立安積高等学校が創立140周年を迎える。そして、令和７年４月１日に福島県立安積中学校が安積高校に併設される。これは、福島県の中等教育ひいては人材育成にどのような意味を持つのか。その意義は何か。筆者は、自身の経験や見聞きしたことから、安積の中高一貫校としての意義そして期待される福島県の人材育成への効果から、本稿を書いてみたいと願った。

２．なぜ、「中高一貫校の歴史的経緯と意義」について書くのか
筆者は旧・岩瀬郡長沼町に生まれ育った。母校・安積高校へは91期の入学・卒業である。還暦を過ぎ、もうすぐ本格的なリタイヤ人生を迎える。憧れの安積高校へ入学してから、もうすぐ半世紀となる。その人生で、教育の現場において、生徒･学生としての、もしくは指導者としての時間をそこそこに過ごした。安積高校を卒業して、いわゆる国立一期校・二期校時代の最後の入試をへて筑波大学第二学群農林学類（現･生命環境学群生物資源学類）へ入学、卒業後は大学院博士課程（５年一貫制）へ進み修了した（農学博士の学位取得）。
大学院修了後、（財）電力中央研究所に入所し、環境バイオテクノロジーの研究に携わった。生物科学部長、（職制改正後）バイオテクノロジー領域リーダーを経て、研究コーディネートやマネジメントを行うポストを経て定年退職した。この間に、ロンドン大学キングスカレッジ博士研究員、東北大学大学院客員教授、東京大学・同大学院、中央大学、学習院大学、日本大学大学院、近畿大学の非常勤講師を務めた。現在は、国立研究開発法人へ再任用職員として勤務しており、国際研究協力に係る仕事や国の研究開発プロジェクトのコーディネートなどを担当している。
大学へは、生物部に属して活動していた際に指導頂いた松本敏則先生と片野伸雄先生が東京教育大学のご出身で、筆者が大学選びを迷っていた際に、筑波大学（＝東京教育大学の後身）を勧めてくださったこともあり受験を決めた。大学の歴史などよく分からないで決めたが、大学に入ってからいろいろと知ることになった。
筑波大学生物資源学類の前身は、東京教育大学農学部である。東京教育大学農学部の設立母体は、駒場農学校の一部と東京高等師範学校の一部である。なお、駒場農学校は、札幌農学校（現・北海道大学）と並ぶ明治時代に設立された官立農学校で、ここから東京大学農学部と東京農工大学農学部も派生しており、筑波大学生物資源学類とあわせ３つの大学農学部のルーツとなっている。
現在の大学受験高校番付けで、西の横綱が兵庫県の灘高校、東の横綱が筑波大学付属駒場高校と言われている。その筑波大学付属駒場高校（筑駒）は、東京教育大学農学部の付属学校として設立された経緯を持つ。筆者は、大学４年生の時、付属駒場高校で教育実習を行った経験を持つ。なかなか得難い経験をさせて頂いた。そこで経験した･見聞きした筑駒での教育は、なるほどと唸るものであり、それは母校の中高一貫校化を考えるうえで大きな示唆を与えるものである。

３．新制中学校･新制高校と中高一貫校
第二次大戦後、日本ではアメリカ指導で、学校教育システムの改革が実施された（あくまで受け身の表現をする）。いわゆる新制度：６－３－３－４－（５）制である。それまでの日本は、複数の学校教育システムが併存していた。初頭教育は小学校と高等小学校など、中等教育は旧制中学校や師範学校、青年師範学校など。高等教育は、旧制高等学校、帝国大学予科、高等師範学校、帝国大学、文理科大学など）。新制度では、単純化され、中等教育が新制中学校３年・新制高校３年、高等教育は大学・大学院となった。
旧制高等学校は、文系・理系と進路が分けられるのが基本であり、現在の日本教育での文系・理系の原型となった。高等教育（や中等教育）で文系・理系と分けるのは、日本と日本の影響を受けた少数の国々のみである。
戦後の教育システムの変更（とあえて表現する）が、中等教育での学校別の勉強のやり方（というか受験対策）に影響を与えた。中等教育のやり方を変えてきたのが、私立の中高一貫校である。大学受験の成果に顕著な効果をもたらした。その代表例が灘中学・灘

高校である。狐狸庵先生こと作家の遠藤周作氏（故人）は、旧制灘中学の出身で、後年、「灘出身の秀才」とマスコミに言われ、「その当時はそんなんではなかったよ」と言っていた記事を読んだ記憶がある。当時は、公立（旧制）中学の勢いがあった。

東でも、（東京では）1950～1960年代は、東京大学合格者数の日本一は日比谷高校であった。日比谷高校は、旧制東京府立一中。東京都立の多くの名門高校は、東京大学合格者数は極めて多かった。しかし、1967年に東京都では「学校群制度」が導入され、都立の名門校の凋落が始まった。そして、私立・開成高校が、1977年から東京大学合格者数が全国トップになったことに代表されるように、私立の中・高一貫校の躍進が続いた。開成高校は、私立の中・高一貫校なのである。開成高校の前身・創立校は、共立学校で、これはNHK「坂の上の雲」でも主人公の秋山真之を演ずる本木雅弘さんが旧・本館（安積歴史博物館）のバルコニーから身を乗り出し仲間に挨拶するシーンがあったが、その「共立学校」である。

これらの灘高校や開成高校は、大変に優れた授業・指導を６年間のシームレスで行うために、お金をかけてこれを実施し、成果を残すようになった。神戸や東京は裕福な家庭が多かったのである。都立高校は、結果として、中高一貫校に行かなかった人が進学する学校になってしまった。現在、東京都内の高校生は約６割が私立に通っている。この都立高校の惨状に業を煮やした名門高OB・OG（の東京都職員）が都立の復活をかけて、都立の中・高一貫校を設立し、日比谷高校は中・高一貫校化の成果として、2014年以降、公立高校としては東京大学合格者数トップとなっている。

公立高校の中で、いち早く中高一貫校化した学校が、筑波大学の付属校、お茶の水女子大学の付属校、東京学芸大学の付属校である。それぞれ、東京高等師範学校、東京女子高等師範学校、東京都内の師範学校（第一、第二、第三、青年）をルーツに持つ。各大学は、国立で、先導的な教育研究および教員養成実践を（国立である）付属学校にて行った。各大学の付属中学・高校での実践は、体系的である。男子校、共学校、女子高（中学までは共学）といった各パターンでどのような教育がどのような効果をもたらすかを検証している。

筑波大学付属駒場中学校・高校（いわゆる筑駒中・高）は、前述のように東京教育大学農学部の付属として設立された。設立当初は、高校卒業後、直ちに実業系に進む生徒もいたと聞いた。その後、筑波大学の付属高校で実業系学科教育を行う実験校として付属坂戸高校が設立されたので、筑駒は男子校としての教育実験校となった。中学校は３クラス、高校から１クラス増える。１学年160名でその50～60％が東京大学に進む。なにせ、東京大学駒場キャンパスと東京教育大学農学部キャンパスは、京王井の頭線　駒場東大駅をはさんで正対している。近い。

筆者は、筑駒で教育実習を行った。担当したのは、高校１年生の化学であった。

４．筑波大学付属駒場中学・高校での教育

筑駒での教育実習は３週間だったと思う。指導教諭の助言を受けて、授業計画を作り、授業を実施した。気体の法則（ボイルの法則、シャルルの法則、ボイルシャルルの法則あたり）の授業を行った。

筆者が筑波大学に進んだのは、入試制度の特徴も理由であった。郡山に比べれば、はるかに田舎である長沼町で生まれ育った筆者は、生物系・農学系に興味を持った。ただ、特定の学科までは決めきれなかった。筑波大学農林学類では、４つの専攻のうち、１年生では４選考の基礎学習を行い、２年生で２専攻の選択学習を実施し、３年次に専攻を１つに絞る。４年では卒業研究を実施して学部（学群）を終える。受験前に、それを知ることができたので（要領を詳しく読んだ）、大学に入ってから専攻を決めることが出来た。当時の専攻名は生物応用化学と言った。

化学は、高校生のころから割と得意であった。それは、化学を教わった穴澤久作先生が教える名人だったからである。穴澤先生は、結構、安高生に厳しかった。安積は名門校とか進学校とか周りはちやほやするが、全国レベルでは200番目位だ。安高に入って天下を取ったつもりでいる田舎者を、３年間で全国との競争に勝てるまでにするから覚悟を持って勉強するように、と言っていたことを思い出す。

筑駒での授業は、気合を入れて実施した。その授業を終わったとき、自分としては手ごたえがあったが、指導教諭の大谷先生（忘れもしない名前です）が、「君の授業はなにか体を骨にまで削ってゆくような形だ。授業は体に肉をつけてゆくような形が必要ですね」と講評してくれた。安高での穴澤先生の授業は、低レベルの田舎の高校生が如何に重要点を理解し、その知識をテスト問題解答のため使いこなせる（＝狭義の学力）ようにするには、強力であった。しかし、それをそのまま真似した授業をしても、筑駒の生徒には響かないのである。穴澤先生の教え方が悪いのではない、自分の本質的なレベルの低さが問題なのであった。筑駒の授業（他の教育実習生や筑駒の先生の授業）を、観察した。うん、教育実習生としてのレベルは、自分はまあ真ん中くらいの成績はとれるだろう。でも筑駒の先生の授業、良く考えられているなあ準備されているな・・・。実験を、高校１年生で、ここまでやっている、レポートを書かせてもすごい内容まとめてくるな・・・。筑駒生の質の良さと、授業のレベルの高さに感嘆した。

教育実習を終えたのは、梅雨前の季節。それが終ったら、進路を決めなければならない。教員試験を受けるか、大学院を受けるか、まだ迷っていた。筑波大学の大学院システム（当時）は、２年間の修士課程と５年制の博士課程（５年一貫）があったが、２年制の修士課程は専門性豊かな社会人育成を目標にかかげ、一方５年制の博士課程は研究者育成を目標に掲げていた。大学での優秀層は（当時は）、公務員上級職、大手企業、研究機関研究職を目指す人が多かった。それらは、何れも競争が厳しい。大学院博士課程への進学

小橋クリニック

院長　小橋主税（86期）

福島県須賀川市仁井田大谷地172-3
TEL 0248-72-1555

希望者は、実質的には、院試を受ける前に、教官による選別（指名）があった。その選別を潜り抜けても、院試に受からなければアウト。院浪しての再チャレンジは、実質的に不可能（次の年にも新しい人がやってくるので、合格枠を確保するのは難しい）。就職試験シーズンも終わっているし、もう進学はあきらめて、次年度の就職に賭けるしかない。

幸運にも院試に合格し、大学を卒業し、大学院で研究職を目指す日々が始まった。大学院時代は、大学で教員免許を取ったこともあり、（一応、大卒にもなったので）受験予備校講師のアルバイトをして生活費を稼いだ。理科(特に化学)や数学を教えた。そこでも、受験生がてっとり早く点数を取れるような教え方をした（せざるを得なかった)。そういった教え方をしながら、「体に肉をつけてゆくような授業とは？」と自問しながらやっていって時が過ぎた。

大学院を修了し学位（農学博士）も頂き、研究職に着いた。その数年後インターネットの時代が始まる。インターネットを使い、いろいろなことを調べ、深い考察に役立てることができるようになった。気体の法則に関して、肉になるような教え方はどのようなものなのか？というのも、暇な時に考えた。そこで、ボイルの法則とシャルルの法則には約150年の時間のギャップがあることを知った。そんなに時間がかかったのはなぜなんだろう？

その経緯を調べ考えるようにすることができれば、それは肉になるような教え方になるのではないか･･･。ちょっと新しいアイディアが出来た、しかし、その後、やれてません、すいません。

５．研究職と教育職

大学院を修了した後、（財）電力中央研究所に研究の職を得た。ああ、社会からドロップアウトせず職につけた、嬉しかったし有難かった。

そこでの研究生活で少しずつ社会から認めてもらえる成果を出すことができるようになり、それらがきっかけの一つになり、30歳代中頃から、大学や大学院での講義を実施したり、学生の指導も行うようになった。学生の指導では、博士論文の研究もSuperviseした。東京大学で初めて講義をした時の賃金は、父親へお酒を贈るために使った。

研究職と教育職を兼ねる人物は、結構存在する。大学の専任教官は、そのものなのだが、研究機関に籍を置きながら大学も兼務する人は結構多い。ちゃんとした研究職の方は、教育もうまい。教育は、力を引き出す、という意味がある。研究者が、・研究対象に関する情報を良く調べ、・仮説をたて実験／試験／調査計画を作る。・その実験／試験／調査は適切な方法論に従う必要があり、それを実行する。・実験／試験／調査の結果を取りまとめ、仮説を検証する、というサイクルを繰り返すが、それを実施できるようにするのが教育なので、研究者は教育者に近しいのである。

中等教育においては、・課題に関する情報を良く調べ伝える。・課題に関する回答法の実践を行う。・その実践の結果を評価する、というサイクルを繰り返す。これを教師と生徒が共同実施するのである。

６．安積の中・高一貫教育に求められるものは何か

福島県における中・高一貫教育は、先進的に会津学鳳中学・高校で始まったが、満を持して旧・福島県第一尋常中學校である安積高校において行われることになった。その詳細は、福島県教育委員会の関連webサイトをご欄頂きたい。

福島県教育委員会　中高一貫教育について

https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/edu/kaikakushitsu04.html

福島県立安積中学校・安積高校において行われる教育は、どのようなものが求められるであろうか。上記web資料では、なかなか本音のところが見えないし見えるべきではない。

本音は、「福島県立医科大学医学科」に受かる生徒を沢山輩出することだと、筆者は思っている。福島県では医師が本当に必要とされているが、福島県出身者が医大医学科に合格する数が少ない。他都道府県に、現状、負けてしまっている。他都道府県出身者の県内定着率は課題があると聞いている。もちろん、東京大学等の有力大学の多様な学部へ進んで、「末は博士か大臣か」となって、地元福島県へも貢献してくれる人物になってもらえるのも大事である。明治以来の学校制度は、全国的に貢献できる人物の例として「末は博士か大臣か」を目標としてきたのであるから。でもやっぱり、福島県出身者の医者が欲しい、福島県は。福島県の公教育として、中・高一貫校の生徒には、合格にかなうだけの学力・見識・人間性を身につけて欲しいのだ（と、思う)。

そのために、県立安積中・安積高の生徒には、知力・徳力・体力に優れた文武両道の身となって欲しい。先生方には、身につく、レベルの高い教育を実施して頂けるのを期待する。筑駒方式（レベルの高い授業＝思考力・実行力が身に着く）＋開成方式（受験対策の効率的なカリキュラム＝先取り学習と問題演習)だろうか。筑駒の生徒は、受験勉強など自分一人でさっさとやってしまう生徒が多い。うまくいかないケースは、中学校から入った生徒で英語をおろそかにしてしまった人。英語は中学からですから。ある程度、受験対策をやる必要がある生徒が多い＝開成や、安積では、効率的なカリキュラム＝先取り学習と問題演習で受験力をつける必要がある、と思う。

そんなこと、ワタシが言わんでも先生方は百も承知、二百も合点ですね。でもなにか必要があれば、東京桑野会に声をかけて下さい。どうぞ宜しくお願いいたします。

創立140周年を受けて今思うこと

安孫子 哲教（115期）

安積高校は今年で創立140年を迎え、本年４月には140期生を迎える。

140年という年月は、あまりにも長すぎて一言でその歴史を語ることは当然できないが、安歴博の存在こそが何よりその歴史と伝統を物語っている。

卒業をした今でも安歴博は私にとって特別な存在で、階段を踏みしめる重厚感は他では味わうことはできないし、大講堂の壮大さは変わることなく、凛とした雰囲気がいつも自分の背筋を伸ばさせる。

今年で私が安積高校へ入学して４半世紀経つが、安積で学んだ経験は、今の私の生き方やものの考え方に大きな影響を与えていると思う。

それは、安積の自由な校風に学び、安積の精神である「開拓者精神」を学んだことにあると思っている。

もっとも、自由と言っても、好き勝手に何をやっていいという意味ではなく、自主的に考え自主的に行動することが認められていることである。学校全体で安高生の自主性を認めることで生徒と教師の間で信頼関係が生まれ、安積の自由な校風を生み出していたのではないかと思う。

入学してすぐに行われる応援歌練習や先輩方と１年生が対面を果たす対面式は、新入生ながら恐れていた行事であるが、今思えば、学内行事とはいえ、先輩方が代々築いてきた伝統に基づいて行われる行事であり、安高生の主体性を認める行事の１つであったと今でも思う。１年生の時には先輩方に圧倒されてばかりであったが、学年が上がるにつれて、自分達も先輩達の意思を継いで、後輩達のためにこれらの伝統を伝えていきたいと思うようになったのは、自主性の一つだったのではないかと思う。

ところで、高校時代は演劇部に所属をしていた。中学時代は硬式テニス部に所属していたため、テニス部に入部するか悩んでいたが、新入生歓迎会での演劇部のプレゼンを見て、なぜか演劇部に興味を持ち、演劇部への仮入部をしたのである。「仮入部だからいつ

でも抜けられるだろう」という安易の気持ちで仮入部をしたのだが、いつの間にか本入部とされてしまい、顧問の先生に正式に退部をしたいと相談をしたことがあった。その時、顧問の先生から、「テニスは大人になってもできるかもしれないが、高校演劇は今しかできないかもしれない。もう一度考えてみたらどうか」と言われたのである。この時、私は、悩んだものの、「確かに高校演劇は今しかできない経験なのかもしれない。やったことないけれど挑戦をしてみるか」と妙に納得してしまい、最終的には演劇部に入部をした。その結果、役者のみならず、舞台美術などの裏方まで経験をすることができた。今でも演劇部の先輩方との交流は続いており、演劇部に入部したことを後悔したことはない。あれから大人になり、何か新しいことに挑戦する際、顧問の先生が掛けてくれたあの時の言葉を思い出し、「悩むならとりあえずやってみよう」という考えをもって物事に取り組むようになったように思う。もちろん、何か新しいことを始めたり、経験したことがないことをすることは、やはり恐怖心があるものだが、意外にやってみれば何とかなったりするものであり、「やらない後悔よりやる後悔」といった言葉があるように、「悩んだら挑戦してみよう」という考えを大切に日々生活している。このような部活の経験も「開拓者精神」を学んだ場であったように思う。

140周年を迎えた今でもこのような自由な校風と安積の精神は、変わることなく受け継がれてほしいと思っている。

さて、来年から安積高校も中高一貫校を併設することとなり、新たな転換期を迎えることになる。安積の歴史の中で、私の世代では、男女共学化という大きな転換期があった。

中高一貫校となることは、中学生の段階から安積の自由な校風の下で学べるのであり、これから入学する後輩達には、チャレンジ精神を持って、思う存分に学業だけでなく部活や自分の趣味に励んでほしいと思う。安積高校には、「文武両道」「質実剛健」「開拓者精神」といった３つの精神があり、学校生活を通して様々なチャレンジを許してくれるはずである。そして、偉大な先輩方が大勢おり、自分達も同じくその一員として未来を切り開く力や可能性が大いに備わっていることを決して忘れないでほしいと思う。

安積高校はこれからも進化を続け、今後も多種多様な人材が輩出されることを期待したい。今後150周年、200周年とどのような進化を遂げ続けていくのか、とても楽しみである。

P.S.東京桑野会は、年一回の開催であるが、卒業以来あまり触れることの少ない安積の空気に触れることができる数少ない場である。この他、100期以降が集まる若手会も開催しているので、久しぶりに安積の空気に触れたいという若手会員がいらっしゃったら、是非とも参加してほしい。

創立140周年にあたって

佐藤 昭明（85期）

母校の創立140周年、誠におめでとうございます。私は85期ですので、卒業して50年以上が経過しました。高校当時の部活は、JRC（青少年赤十字団）というところに所属し、日曜の早朝の郡山駅前清掃や老人ホーム慰問などを行っておりました。部室がなんと本館正面玄関真上の２階の部屋でした。いま思いますとよくもそんな貴重なところを使わせていただいていたものだと思います。寛大な心の校風だったということかと思います。高校時代を含め賞には昔から縁がありませんが、唯一の自慢は高校時代皆勤賞をいただいたことです。既に会社員生活を終えていますが、時折実家に帰り郡山の空気を吸っております。

私はいま、ドジャースの大谷翔平選手が日本からメジャーに挑戦しに行くときに心の支えとして持っていった中村天風著「運命を拓く」で話題になった公益財団法人中村天風財団の講師をしております。サラリーマンの現役時代から会員でしたが、数年前に講師に就任しました。

ここで少し、中村天風の紹介をさせていただきたいと思います。天風は、明治９年に旧華族の家に生まれ、日露戦争の折に軍事探偵（スパイ）として満蒙の地で活躍しました。当時日本から派遣された軍事探偵は113名で生きて帰ってきたのは、わずかに９名という厳しい状況でした。腕も度胸も人一倍強かった天風ですが、日露戦争が終わって間もなく当時死病と言われた馬が駆けるように病状が悪化するという奔馬性肺結核に罹ってしまいました。軍事探偵として死をも恐れず颯爽と活躍していたころとは違い、毎日毎日身体の事を心配する弱い心になってしまいました。どうにかして弱くなった心を立て直す方法はないかと手を尽くしますが国内では得られず、アメリカ人の書いた「いかにして望みを叶えるか」に感動し、その著者であるスエッド・マーデンに会いにアメリカに渡りましたが、実際に本人に会うと思うような答えを得られませんでした。その後、更に解決策を求めヨーロッパに渡り当時の世界的にも著名な哲学者にも会いましたが、望みは叶えられず失意のまま帰国することになりました。

ヨーロッパからの帰国の途中、偶然にもエジプトのカイロでイギリスから帰国途中のインドのヨガの聖者に会い、それが縁でインドのカンチェンジュンガの麓で修行を積み、心の持ち方を変えることにより結核を克服し帰国しました。

日本に帰ってからは、実業界で活躍しましたが、思うところがありインドでの体験をもとに心を積極的にする方法やヨガと武道から取り入れた呼吸法、運動法、天風式座禅法などを教えるようになりました。心を積極的にする方法には、潜在意識に対する働きかけや現実の生活の中での心の持ちよう、心の使い方などがあります。天風の教えに影響を受けた方々には、古くは東郷元帥、後藤新平、原敬、横綱双葉山、松下幸之助などなど最近では松岡修造、最近亡くなった日本航空を再建した京セラの稲森和夫氏などがおります。

私は、毎週日曜日の午前中、東京文京区の護国寺にあります天風会館での行修に参加して会員へのサポートをしております。入会後はありがたいことに健康も会社員生活も充実しておりました。特にJR東日本のサラリーマン時代は、労働組合との団体交渉に会社側の交渉担当として携わっており、ストレスのある日々の業務の中で中村天風の教えは大いに役立ちました。心の持ち方に加え、心の動揺や、外界からの刺激に対して体の特殊な体勢をとることで、ストレスから心と体を守る方法は大いに役立ちました。

現在は、講習会やカルチャー教室での講演などがあり、朝から講演原稿の執筆や、オンラインでの運動法の指導などのために多忙な毎日を過ごしております。会員の多くは、忙しい現役を退かれた後、第二の人生を充実して活きる方法を求め参加される方々も多く、特に大谷選手のお陰もあり、最近は見学に来られる方が多くなってきました。

天風は、人間は何のために生まれてきたかという問いに対して、「この世の進化向上に貢献することだ」と喝破し、更に続けて「ひたむきに人の世のために役立つ自己を完成することに努力しよう」と言っておりますので、私自身もこれからもその事を目標に日々研鑽していきたいと思います。安積高校の後輩の皆さんも自己自身の人格を高め、世の中の進化向上に貢献されんことを祈っております。

私が過ごした安高時代

佐久間 信一（91期）

○どんな時代だったか

私が安積高校に入学したのは1975年、オイルショックのちょっと後であるが、駅前には大型の店舗が複数オー

プンする等、勢いがある時代であった。スマホ等は当然なく、ウォークマンもまだなかったので、通学する電車の中は、本を読むか皆としゃべるかというアナログ時代であり、1970年代のいわゆる団塊の世代の残像がうっすらと残った時代であった。

中学時代の坊主頭から解放されたことや、応援団のひげ面の先輩の姿を目にするなどして、大人の世界に踏み入れたような思いを抱いたものだ。

○仲間意識

小・中学校と違って、見知った顔はほとんどいない中、緊張と不安な気持ちを抱えながら入学式に臨んだ。すぐに応援歌の練習が始まるとともに、上の階にいる上級生から１階にいる１年生に対して、水が入ったビニール袋を投げつけられる、いわゆる「水爆」攻撃等を経て、徐々に高校生活に馴染んでいった。あの時代は、頭に受験という重しがのしかかり、かといって勉強に熱中しきれずに、晴れやかな心持になることは多くはなかった。きっと、そう思うのは、その後の大学生活の解放感との比較からなのかもしれない。成績は真ん中あたりをうろうろしており、優秀な生徒はいったいどんな勉強をしているのかと思っていた。受験生という立ち位置は運命だと割り切り、同じ心もちの仲間（＝安高生）とともにふざけあいながら過ごした。

その仲間意識を高めたのは、選手壮行会、高校野球の開成山での応援、そのときいつも歌っていた歌（「紫の旗行くところ」）であった。運動部に入っていない私だったが、応援団がジャンプするときの掛け声による高揚感により、気持ちは体育会系となっていた。

○男子校で良かった！？

男しかいない高校生活は特に違和感なく受入られたが、恋愛感情は中学時代のものを引きずることで満たしており、積極的に女子高生と新たな関係をつくるだけのパワーもなく心静かに過ごしていた。それでも、女子高前を通るだけで体が硬直し、かなり動揺したものだ。多くの女子高生が安高に来る学園祭を前に胸を躍らせたが、実りない現実によけいさみしさを増幅させた。電車での通学だったので周りにいる女性に全神経を傾けながらも、男同士で馬鹿話で盛り上がっていた。そういえば、どこかのサークルBOXに某女子高のバス停が置いてあった。誰がどのようにしてそれを運んだのかわからないが、重いコンクリートの足もついていたように思うが。それを見て私はとても感動した覚えがある。一事が万事そんな感じであった。テレビの学園ものを見るたびに、我々の時代が男女共学であればと妄想することは多々あったが、それでもあの時代を否定するものではない。

○先生方に感謝！！

授業はどれも充実し、先生方は生徒に一生懸命対応してくれたのも安高時代の自慢だ。受験にあまり関係しない科目は、生徒の息抜きになるような気づかいがあり、３年生の時の体育はゲーム中心で楽しみながら日頃のストレスを発散させてくれた。武道（剣道）は厳しさの中に楽しさを感じさせてくれた時間であった。防具等が共用であったが、籠手はやや粘着的な湿り気があり、息をこらえ手を入れるところから始まる。怖いものを前に目をつぶって突き進む経験だったと、何故かその後も思い出してしまう。

そういえば、私は京都で大学時代を送ったのだが、10月の午前中に下宿をしている銀閣寺近くで学生服姿で２本線の学生帽の一団に出くわした。近づいて校章をみるとやっぱり安高生。「先生は誰が来ているの？」と聞くと３年時の担任の先生だった。先生の誘いがあり、その日は、そのまま修学旅行に参加することになった。座席はバスガイドさんの目の前で、後輩たちにうらやましがられたのは当然であった。そんなこんなで、先生方に感謝である。

○今思うこと

安高で過ごしたのは、これまでの人生の中でたった３年間であるが、人生の多感な時期の３年間はとても思い出深い時期であった。時代は違っても先輩はまた後輩と共に、「紫の旗行くところ」を一緒に歌う時の感動は大きい。それは青春のある時代の拠り所を共有しているからだと思う。

東日本大震災、また正月早々に起きた能登半島地震では、人間社会の脆さと人と人の絆の大切さが語られる。安積の繋がりも絆の一つ、これからも大切にしていきたいと思う。

安積中学への父の想い
～安積創立140周年に寄せて～

首藤　敬勝（80期）

「俺だって安積中学に行きたかったんだ」。母は2002年に他界しましたが、その翌年の母の新盆のときにいきなり父・信勝はそう言いました。それまで父からそのようなことは一度も聞いたことがなかったので、正直言って大変驚きました。

父は大正10年（1921年）にこの世に生を享けましたが、生まれて100日で父（私の祖父）に死なれてしまいました。当然自分の父親の顔を知りません。「自分の親の顔を知らないほど切ないことはないんだ」と父はよく言っておりました。

父には姉と兄がおりましたが、幼子３人を抱えて父の母（私の祖母）は本当に大変だったと思いますが、幸いにも親類の家の離れに住まわせてもらい、一家４人何とか糊口を凌ぐことができました。父は新聞配達等をしながら尋常高等小学校を終えました。

しかし、いつまでも親類に甘えている訳にいかないということで、父は当時の満鉄（南満州鉄道）に入社し、数え17歳、満15歳のときに神戸から満州に渡って行きました。父には満州で一旗揚げようといった大それた気持ちはなく、いつまでも親類の厚意に甘える訳にはいかないということからの満州渡航で、向こうでどのような生活が待っているか皆目見当がつかなかったそうです。

向こうに行って満鉄の方から「お前これをやってみろ」と父が言われたのは電気工事関係の仕事でした。私と違って手先が器用だった父はその仕事をすぐにマスターし、その仕事を中心に生活を築き、北京の近くに土地を持てるようになりました。

その後、幸か不幸か、日本は太平洋戦争に負け、父は生まれ故郷に戻ってきました。そして、向こうで身につけた電気工事の仕事で生計を立て我々の生活を支えてくれました。お陰で幸運にも私は安積に通うことができました。父には私の入学式、卒業式、進路面談等で何度か安積に足を運んでもらいましたが、ひょっとしたら、その度ごとに父は「自分が経済的に恵まれていたら、ここに通えたのに」と思っていたのかも知れません。

私が安積に入学したときはちょうど創立80周年で、仮装行列や80周念モザイクの製作がありました。80周年記念モザイクの製作を担当されたのは高１の担任だった美術の大家・故水田荘介先生でした（現在の安積の校章は水田先生のデザインだそうです）。水田先生が「君たちの家に壊れた瀬戸物のようなものがあったら、モザイクに使いたいので持ってきて欲しい」とおっしゃったので、父に事情を話し、家の周りにあった、父の電気仕事で要らなくなった碍子をいくつか水田先生のところにお持ちしました。そうした

ら、先生が「これはいい。他にこのような物があったら、もっと持ってきて欲しい」とおっしゃったので、その後も２回にわたって、不要になった碍子等を紙袋に入れ水郡線で水田先生の許に運びました。モザイクができた当時は、「自分が持ってきた碍子はあの辺に使われたんだ」ぐらいにしか思いませんでしたが、「俺だって安積中学に行きたかったんだ」という父の言葉を聞いてからは、このモザイクに対する私の想いが変わりました。

2019年４月19日付「朝日新聞」「天声人語」に朝河貫一先生のことが載っておりました。安積のキャンパスには「朝河桜」もあり、今も朝河先生の魂が強く生き残り、後輩達の活躍を見守ってくださっています。その朝河先生とは比ぶべくもありませんが、私は80周年記念モザイクに父の魂が生きていると自分自身勝手に思い込んでいます（３・11地震による影響が心配ですが）。

父は安達太良が好きでした。岳温泉や中ノ沢温泉等から何度も安達太良に登りました。今改築中の「くろがね小屋」にも泊まったようです。父の最期となったのは郡山の西ノ内病院ですが、妻や子どもたちと見舞いに訪れた病室の窓からは秀麗な安達太良の姿が望めました。父は安達太良を指差し、「おじいちゃんは、あの山に何度も登ったんだ」と自慢げに私の子どもたちに話していました。

父は2018年７月享年97歳で他界しました。私もいつかあの世へ旅立ちます。そうしたら、あの世で父と「♪嫩草萌ゆる安積野や♫雲に聳ゆる安達太郎……」と声高らかに安積の校歌を唄いたいと思います。

ホームページ等で安積の旧校舎を見ると、いつも厳粛な気持ちになります。安積は創立140周年を迎えます。母校の益々のご発展を祈念致します。

紫の旗ゆくところ

玄侑 宗久（88期）

高校時代のことは、これまでまともに書いたこともないし書こうと思ったこともない。今に繋がる都合のいい話ばかりになるような気がして、恐ろしいのだ。渾沌としたあの時代を、いい加減に描いて台無しにしたくはない。書いてしまったことはおそらく現実以上にリアルになり、愛すべき渾沌を失う可能性もある。それは『荘子』の渾沌が勝手に目鼻口を付けられ、ついに死んでしまった話のようではないか。今回の原稿、お引き受けしたからには渾沌に向き合う覚悟だが、用心深く穴を開け、渾沌が元気になるのを確認したあたりで筆を擱きたい。そんな心づもりである。

まず何より嘘偽りなく言えるのは、安高の入学式当日、私は二、三年生の歌う校歌と応援歌に、それまで味わったことのない感動を覚えた。背骨の中を電流が走り、文字どおり痺れた。

当時からずっと、それは野太い男声合唱のせいだと考えていた。しかし最近は、音程の誤差を鷹揚に包み込む読経の如きポリフォニーのせいかと思ったりもする。まぁいずれにせよ、大河の流れのような安心と鼓舞とを、私はその後も同じ歌声に聞き取り、自分も歌いながら確認していたのである。

居並ぶ先生方がまたジグザグで面白かった。ジグザグとは、もしもアドラーの言うように、縦と横の人間関係があるとするなら、その縦・横・斜め加減がジグザグなのだ。上から目線で話す先生も無論いたが、なかには自分の研究に没頭しているのか、申し訳なさそうに上目で生徒を見る先生もいた。一年のときの担任は竹花栄明先生で、とにかく自分の専門の中国史がお好きらしく、世界史の授業では秋になっても中国史が終わらず、中国以外の世界についてはあからさまにスキップした。

しかし竹花先生が毎年年賀状を下さり、励ましの言葉を書き送りつづけて下さったのには驚いた。結婚式に祝辞をお願いすると、それ以後は年賀状ではなく結婚記念日にはがきが届くようになり、それは先生が亡くなる前の年まで続いた。間違いなく先生は、私の人生に大きく影響するような気長な関わりを、意志的に持ってくださったのである。

詳しく一々書くわけにはいかないが、安高は先生方の博覧会場だった。「同じ先生」という括りのなかに、これだけのバラエティがある。学校祭のために映画を作りたいという生徒たちにそれを認め、二ヶ月は欠席してもいいと言い放った先生。トイレで喫煙の残り香を嗅ぎ、全校集会で「もっとうまくやれ」と叱咤した生徒指導の先生。そして試験のとき答案用紙を裏返し、びっしりと勝手な意見を書いた私に、八十点をくれた地理の先生。私の入学する前年くらいに下駄履き通学は禁じられていたものの、バンカラの気風が当時は色濃く残っていた。バンカラとはたぶん、粗末で粗野な外見のなかに崇高な精神を育む文化なのだ。おそらくそうした破調でないと収まりきれない渾沌が、安高生には横溢していたのだろう。

教室には、不穏なエネルギーを秘めた面々が犇めいていた。或いはサッカーに明け暮れ、或いはフランス語を学び、なかには小説を書いている人もいて、確か二年のときに260枚の作品を書き上げた。それは驚歎すべきことで、皆それぞれの将来に直接は繋がらないことに没頭し、豊かな時間を過ごしていた。警察に一番世話になった人がその後県警本部の偉い警官になったのは驚いたが、ことほど左様に渾沌は何でも生みだすのである。

私自身の渾沌は、やはり寺に生まれながら僧侶になりたくはない、という思いが多くを占めていた。剣道に打ち込む一方で、小説や禅についての本も読み、すべてが中途半端なまま将来の見えない憂いばかりが募り、それは二十代半ばすぎまで続いた。だから二十代は憶いだしたくもないが、安高時代は些か違う。戻れない聖域とでも言うべきか……。作家になる、という漠たる思いも、その濃密な渾沌のなかから芽吹いたのだった。

ふと、「紫の旗ゆくところ」を憶いだす。歌う者を奮い立たせ、勝利に向かわせる歌だが、どう考えても「紫」は勝利の色と思えない。儒教が嫌い、道教が好むこの色は、渾沌を包み込む色だ。

【編集部注】
福島県三春町にある「臨済宗妙心寺派福聚寺」の住職。2001年、「中陰の花」で第125回芥川賞を受賞。安積関係者では、1938年「厚物咲」で第７回を受賞した中山義秀氏、1948年「和紙」で第18回を受賞した東野辺薫氏に次いで３人目である。

Jリーグを目指して

谷口 和司（91期）

日本フットボールリーグ（JFL）をご存じだろうか？サッカーのカテゴリーはJ１を頂点にJ２、J３と60チームがひしめく（福島県には２チーム）が、その一つ下のカテゴリーで唯一全国規模のアマチュアリーグがJFLだ。日本には登録されているサッカーチームの数はジュニアを含むと２万６千を超える。大学生以上の大人のチームは4500。そのうち各地でJリーグを目指しているチームの数はどのぐらいあるだろうか？答えはおよそ100。公言しているチームを数えるのは難しいので、各地域のトップリーグ（東北１部リーグなど）の数にJFLを加えると100ほどとなる。もちろんそれらのチームで目指さないチームもあれば、それより下のカテゴリーで目指すチームもあるのであくまでも「およそ」。

さて、それらのチームの中で2023年に最もJリーグに近づいたチームをご存じだろうか。それが私の経営する「ブリオベッカ浦安」である。JFL準優勝。優勝チームがJを目指さない企業チームのため「目指すチーム」としては繰り上げで最上位となる。本来ならJ３最下位のチームとの入れ替え戦に勝てば晴れてJリーグ昇格という

ルールなのだが、事情があって開催されなかった。というのも市内にJリーグの基準を満たす競技場がないため、J３クラブライセンスが交付されていないからだ。

なぜIT企業で働いていた私がサッカークラブを経営するに至ったかを少しお話ししたい。埼玉県の中学校ではサッカー部でサッカーに明け暮れた。しかし親の転勤で本宮一中に転校。当時本宮一中にはサッカー部がなく、「これでサッカーが出来なくなる」と人生初の絶望を味わった。その後サッカーを封印し、安積高校ではギター同好会でギターに励んだ。ちなみに大学時代はクラシックギターの学生コンクールで特別奨励賞をいただくまでになった。

大学卒業後はITエンジニアとして就職。その後アメリカ資本のコンサルティング会社やネットワーク企業へと転職をした。千葉県浦安市に居を移し、息子が誕生して小学生に上がった時に妻と相談し近所のサッカーチームに入団させた。あの時の絶望を息子に託した感じだった。それが今のブリオベッカ浦安の前身のチームだった。私は保護者としてお手伝いをしていいたものの、だんだんと経営のサポートまで行うようになっていった。息子は中学３年で退団したが、親の私がクラブ経営にはまってしまう。そして2014年、当時勤めていたアメリカのIT企業を退職してチームの運営会社を設立。自分が代表取締役となりクラブを法人化してプロリーグを目指す活動を始めた。チーム自体は35年目となるが法人化して10年目となる。

息子が入団した当時の社会人チームは千葉県１部リーグだったが７年かけて関東サッカーリーグに昇格。その後紆余曲折はあったが2022年に全国大会を２つ優勝して2023年JFLに昇格。そして昇格初年度に準優勝をおさめたのだ。JリーグではないがJFLはプロサッカー選手も多く（当チームは半分がプロ契約）経営自体はJ３のチームとそれほど変わらない。アマチュアリーグながら全国遠征があり、当チームも130社ほどのスポンサーによって経営が成り立っている。2012年関東リーグ昇格時にはスポンサーの数は10社ほどだったが、地域の皆様にご支援をいただきながら順調に規模を拡大している。ちなみにアカデミー活動は千葉県トップクラスで630名が在籍。こちらも息子が入団した頃の倍に増えた。小学生から高校生までの全てのカテゴリーで千葉県のトップリーグにて活躍をしている。

法人とはいえ、クラブの経営は一般企業とは大きく異なる。企業は利益を追求するが、我がクラブチームは地域に希望を与え、地域を一体にするために活動をしていると言っていい。プロ選手には給料を支給し、全国遠征するためにはかなりの費用が必要だが、実際に利益はほぼ出ない。価値は「どれだけ地域の皆様に愛されたか？」だ。サッカーが強いだけではだめなのだ。年間100回近い地域貢献活動をこなしている。子どもたちにサッカーを通じて人間力を養い、将来社会で活躍できる人材育成をしていると胸を張って言える。数年前からは全国高校サッカー選手権やJリーグで活躍する選手も出始めた。

浦安市は東京都に隣接し都内に通勤するビジネスマンが多い。しかしこの街で生まれた大人は少ない。高層マンションが多く建っており、転居してきた方々が多い。そんな街にJリーグがなぜ必要なのか？実は都内に通うビジネスマン達は地元愛が希薄な傾向があるのだ。自分がそうだった。仕事が終わると都内で飲んで、家には寝に帰り、週末はせいぜい子供達と公園で遊ぶ程度。地元選出の議員さんの名前も知らず投票にはあまり行かない（以前の私の話だ）。

ご存じのように浦安市には日本を代表するテーマパークがある。ところが長年住むと行かなくなる。私も自転車で行ける距離だが10年間で一度も行っていない。テーマパークは街を（日本を）代表してはいるが市民の中心とは言いがたい。名前も「東京XX」だ。そんな都会の街にJリーグがあったらどうだろうか？みんなが熱くなって街の名前を連呼して「おらがチーム」を応援する。この瞬間は間違いなく市民が一体となる。そして地元愛を育み、その結果街を洗練させ発展させるのだ。

自分はサッカーの経験はほぼないが、企業で培った営業、経営、組織運営の力を出してJリーグを目指すクラブを経営している。クラブの監督は都並敏史。ある程度サッカーをお好きな方はご存知だろう。Jリーグ発足の時代に日本を代表する選手であり、Jリーグの監督経験があり、今でも解説者としては高い評価を受けている。二人で「経営」と「現場」それぞれ責任をもって統括している。

しかし順風満帆ではなかった。毎年のように達成不可能と思える難題に向かいながらも地域の皆様と知恵を絞って乗り越えてきた。大きな赤字を計上したこともあった。ある年は「Jリーグを目指すな」と（過去の）市長に釘を刺されたこともあった。JFLは天然芝での試合が義務付けられており、一昨年までは人工芝の市内の競技場（ネーミングライツでブリオベッカ浦安競技場と命名）で試合をしていたがJFL昇格とともに市内での開催ができずに千葉県の競技場を転々とすることになった。一番遠い競技場は市内から車で２時間もかかるのだ。ホーム開催でありながらアウェイ遠征のような状態が続いている。

幸い現市長や議員の皆様は我々を積極的に応援していただいており、Jを目指すことにも好意的であることは付け加えておく。

我々は単にJリーグを目指すのではない。地元の子供たちの目標を作りたい。地域の皆様が一体となりそして熱くなれる試合を行い地域愛を深めたい。日本一アクセスの便利な競技場を作り（東京駅まで14分、羽田や成田には１時間おきにバス、近くのテーマパークからはバスが日本全国に展開）アウェイのお客様が日本一お越しになるスタジアムを作りたいと夢は広がる。

最後に安積のOBでは現役選手の吉田君のお父上の吉田弘倫さんが95期。毎回ボランティアに駆けつけてくれる遠藤立郎さんは97期。安積卒業生のサッカーを愛する皆様、一緒にJリーグを目指しませんか？サポート、スポンサードなどご連絡お待ちしています。

メール：ktaniguc@gmail.com
（ブリオベッカ浦安）

明治維新から私たちは何を学ぶべきか

～安積創立140周年に寄せて

本田　宏（86期）

「はじめに」

高校３年生の秋まで世界を見てみたいと国際線のパイロットを夢見ていた。宮崎航空大学受験を直前に控えた夕食のさなか母が泣いて吐露したのが、保土ケ谷化学工場に学徒動員されていた時に米軍の空襲で同級生を亡くした哀しい思い出だった。「飛行機乗りは戦争が起きたら一番始めに引っ張っていかれる」と反対され思いがけず医師になった。あれから半世紀、外科医の道を歩んで多くの患者さんの生老病死と対峙した私は、現在日本の医療再生と新しい戦前阻止の活動に全力を投じている。

「公立公的病院再編統合の背景にある医療費抑制策」

厚生労働省は、新型コロナ感染症による「救急患者受入れ不能、自宅療養・在宅死」などなかったかのように、「医師不足と赤字」を理由に全国400以上の公立公的病院の再編統合を進めている。

わが国の公立公的病院は世界的に見ても20％と極端に少ないが、歴史を振り返ると明治10年当時の日本には官立病院が多かった（官公立71、私立35）。しかし明治10年の西南戦争の赤字を理由に官立病院が潰されて、明治21年には私立病院が多数をしめる

ようになり（官公立225、私立339）、現在の民間病院主体の医療体制に至っている。

日本の医療費削減政策は1983年に厚生省官僚が唱えた「医療費亡国論」がその基本となっている。医療費を抑制しなければ国家財政は破綻すると喧伝し、病院が受け取る医療費（診療報酬点数）を先進国最低に抑制し続けている。その結果、医療機関は経営に苦悩する一方で、患者の受診時窓口負担はサラリーマンが３割、高齢者も２割へ増加されて先進国最高レベルとなっている。

医師が増えると医療費が増えるとして医学部定員も削減され、日本の医師数はOECD加盟国平均より13万人不足している。その結果2024年４月から医師にも実施される「働き方改革」では、年間1860時間という過労死ラインの倍の時間外労働が認められ、過労死や医療事故の増加も懸念される事態となっている。

「樹液を吸い取る政治のルーツは薩長政治？」

「世界に冠たる国民皆保険制度」の実態は、国民から税に加えて社会保険料を搾り取りながら国民のいのちを軽視する政治の証明ではないか。

この問題を日本司法の父とされる江藤 新平は明治初期に喝破していた。同じ佐賀藩士の副島 種臣が語った長州人の言い分***「われわれ長州藩は関ヶ原の合戦（1600）に敗れて領地を三分の一にカットされ、それから270年間敵である徳川に恨みの一太刀を報いんため、臥薪し嘗胆する苦しみに堪えて来た。鳥羽・伏見の戦に続く戊辰の戦で、われわれは藩の資金を投入し藩士の血を流した。その結果が今の新政府だ。利権は270年間堪え忍んで来た屈辱と血の犠牲に対する当然の償いではないか」***に対して江藤はこう答えている。***「奴ら薩長人は国家と言うこの苗木を丹精して育てるよりは、その樹液を吸い取ることだけを考えている。これでは苗木はやがて栄養不良で枯死することは避けられん」***（民権の火柱、日下藤吾　叢文社　平成２年11月１日より）

江藤は佐賀の乱の首謀者として梟首されたが、その背景には司法長官として長州藩士の井上 馨の尾去沢銅山汚職事件や、山縣 有朋の山城屋和助事件の摘発を試みたことが関係していたようだ。

「おわりに」

医療再生を目指して20年余にわたって情報発信活動を続けてきたが、哀しいかな多くの医師は厚労省の主張する「医師は過剰、医療費は高すぎる」を信じている。さらに国民もバブル崩壊から30年以上続く経済低迷の日本で、国民生活の窮状は放置して防衛費倍増を最優先する、「樹液を吸い取る政治」を許している。

朝河貫一博士が警告の書『日本の禍機』の中で嘆いた、「日本人は愚かな指図や悪い指揮にも簡単に従ってしまう傾向がある」は変わっていないのではないか。

日本を安心して暮らせる社会にするためには、１人でも多くの人にわが国の問題を知ってもらわなければならない。新刊を出版し短編映画を完成させた。お手にとって頂ければ幸いである。

樹液を吸い取る政治　医療・社会保障充実を阻むものとの訣別へ
（あけび書房）

短編映画　「公的医療はどこへ行く・差し迫る医療崩壊」

BELLUM OMUNIUM CONTRA OMNES

石井 俊一（82期）

安積高等学校が創立140周年を迎える今年は、辰年、大いに震え発展する年ですが、巨大なプレートの結合部に載っているわが日本列島は、いつでも違う意味で震えております。今年の１月１日にも能登地方を大きな地震が襲いました。亡くなられた方を哀悼すると同時に、かの地の皆様の一日も早い回復をお祈りするものであります。

さて、最近の国際情勢を鑑みますと、ウクライナとロシアの開戦、イスラエルとハマスの戦闘、その他諸々の国際紛争が絶えません。この状態を見ておりますと、私が、大学に入学した一年生の時に一般教養の政治学で学んだ際の担当の先生の言葉が強く思い出されます。それは、トーマス・ホッブズの「リヴァイアサン」中で書かれていたことばです。ラテン語の言葉でBELLUM OMNIUM CONTRA OMUNESベッルム・オムニウム・コントラー・オムネース邦訳は「万人に対する万人の戦争状態」です。思えば、人類の歴史は、戦争の歴史とも言われております。人間は、自然状態においては、必然的に争い戦争状態に突入することになる。その自然の戦争状態を防ぐために「リヴァイアサン」という想像上の巨人、つまり国家が構想されるということが骨子でありました。現在では、それぞれの地政学的か関係から、より多くの紛争がおこり、わたくしとしては、イギリスの当時の政治状況のなかから生まれたホッブズ のBELLUM OMNIUM CONTRA OMUNES万人の万人に対する戦争状態も、単層から複雑な複層化の様相を呈していると感じています。この辺については、安積中学（第４期明治25年卒業）及び早稲田大学の大先輩である国際的歴史学者である朝河貫一博士も研究をされておられるようです。昨年令和５年12月、立教大学で開催された「朝河貫一博士研究会」に臨席させて頂いた折、そのようなお話を伺いました。ただ、実際朝河貫一博士が、ホッブズについてどのような研究をされていたのかは不明です。その研究会の席上、研究者のお一人が、まだ、解明されていない資料が、ダンボールで何箱もあるとのことであり、解明がまたれるところです。また、朝河貫一博士の研究者の文章を読んでおりますと、同じく、ホッブズの見解と朝河貫一博士について言及されている方もおられます。私も、朝河貫一博士の書簡集、日本の禍機及び関連の書籍数冊を保有しておりますが、具体的に言及されているところを発見できておりません。OBの方、研究者の方からの情報をお願いしたいと存じます。

さて、この文章を認めております私は、82期の石井俊一と申します。出身は、須賀川で、須賀川第一中学校の出身です。入学当時のエピソードでいまでも思い出すことがあります。というのも当時須賀川一中から三中までの合格者全員が市内の旧須賀川藩城址である愛宕山の山上に集められ先輩から厳しいお言葉を頂いたことです。自己紹介後、上級生から、いまではよく覚えてはおりませんが、安高生としての心構えなどの厳しいご教示に預かった記憶があります。

ところで私の石井家と安積との関係は、祖父に遡ります。祖父石井國介は、明治23年、二本松で生まれ、当時の安積中学に第22期生（明治43年卒業）として入学しております。同期生には、久米正雄氏がおりました、母からは、久米正雄氏からの葉書を見たことがあるという話でしたが、現物は、引越しの関係で見つかっておりません。祖父は、仙台の旧制二高から東北帝国大学医学部に進んだようです。当時の出来事については、叔母が、面白おかしく次のように語っておりました。祖父以外の方々が一高に合格したのに祖父は、どうもそれには不合格であったようで、当時を再現したあるドラマの中で、みんな一高に合格して喜んでいるところ一人だけ風呂敷をまとめてで

ていく学生が一人いたそうです。叔母は、それが君のおじいさんだ、と言って笑っていました。

祖父は、結婚後、当時の東京市赤坂区（今の港区赤坂）、弁慶橋の近くで医院を営んでいたそうです。大正12年９月１日に勃発した関東大震災を経験したそうで、祖母の話では、医局の薬棚が倒れ大変だったそうです。また、下町方面から火災の雲が眺められたようです。その後、祖父は、祖母の出身地である福島県会津若松に移り、その地で没しました。

そのためか安積中学関係の情報は、その段階で途切れました。叔父は、旧制の会津中学から陸軍士官学校に進み戦死しております。母は祖母とともに上京し、東京育ちでありましたが、戦争が激しくなったころ、叔父の進言で、祖母の姉が嫁いでいた須賀川に疎開し、現在にいたっております。母は、若くして俳句に勤しみ、須賀川において俳句集団に属し、長じてから歳時記の編纂や、句集を発刊しております。ただ、安積中学校当時久米正雄氏がかかわった俳句運動については、須賀川にいた母から聞いた覚えがありません。また、当時、私自身はSFに凝っておりまして、日本の文学関係には、まったく興味がありませんでしたので俳句にはほとんど興味を覚えませんでした。母の影響を受け私自身が下手な句を詠むようになったのは、随分とあとのことです。私の俳句を詠んで母はよく、笑っておりました。

その後は、私及び弟二人が、安積高等学校に入学し、弟の息子二人も安積高等学校に学んでおります。

再度、安積高等学校に強く関与することになったのは、令和３年７月１日からです。それまで東京桑野会幹事長として永く貢献された80期上石利男から事務局を引き継ぎいだときからです。

２度の東京桑野会総会を経て、いま、140周年記念総会へ向けて、準備中でございます。この間、旧制安積中学の創立の歴史を改めて紐解きますと、明治維新から近代日本へと生まれ変わる時代の転換期でありました。司馬遼太郎著「坂の上の雲」を再読し、その感を強く感じたところです。当時は、色々なものが変革を迎え、俳句の世界もそのようでありました。当時の教頭先生らから久米正雄氏が教えをうけ、俳句の結社をつくり、大きく活動されたとか。初めて知りました。汗顔の至りと感じております。また、記録によれば安積高等学校は、高山樗牛をはじめ多くの文人や芥川賞作家を輩出しております。

さらに来年は、当校は中高一貫校へと大きく羽ばたこうとしております。依然として万人の万人に対する戦争状態の中で、我らが安積高等学校は、いつでも大きく進歩しようとしているのを感じます。次の100年後に向けて大きな前進を求め続け、日本や世界の大きく貢献するであろうことは間違いのないところであると感じます。当校の益々の発展を祈念して筆をおかせていただきます。

建築と卓球の話

鹿田 征歳（102期）

現在私は妻と二人で建築の設計事務所を主宰しています。

こうした現況を、高校時代の自分が想像できていたかと言えば、半分位はなんとなく想像していましたが、半分は全く想定外だったと言えるように思います。

まず、なんとなく想像出来ていた今の姿ですが、それは、建築というモノづくりに関わる仕事に就けたことです。「なんとなく」という表現ですが、大学で出会った建築学科の友人の中には、高校時代に衝撃を受けた建物がきっかけで建築に進路を決めたという明確なビジョンを持った友人も少なからずいましたが、私は営業職より技術職、技術職の中でもバリバリのエンジニアというより、好きな絵を描けるような分野といった具合に、消去法での建築業界入りだったので、まさに「なんとなく」想像していた仕事という表現こそ相応しく、いずれにしても、自分の好きだと思える「絵」を仕事に活かせたことは、本当に良かったと思っています。今でも計画案を考えているときは、朝の起き抜けでも、休日でも全く苦にならず、ストレス体質かもしれぬ自分にとっては、本当に有難い仕事に就けたとしみじみ思います。

ちなみに、絵を描くことですが、子供のころから絵画の時間だけは一目おかれ、高校時代も美術の先生から度々美術部への勧誘を受けていました。卓球部部長として頑張っていた自負もあったので複雑な感情もありましたが、安高時代の数少ない自慢できる話の一つでもあります。

ここで余談ですが、部活話しのついでに当時所属していた卓球部の話も少し紹介したいと思います。当時の安高卓球部は活況で、県チャンピオンの深谷君（102期）をエースに、団体、ダブルスなど全種目東北大会出場を果たす等、ちょっとした黄金世代でした。そんな良き想い出を胸に、高校卒業からおよそ20年後、ダブルスのパートナーでもあったエースの深谷君を郡山までアポ無しで訪ねたときの話です。運よく再会出来た深谷君でしたが、どこかに外出する直前でした。そんな状況で慌ただしくする彼が、「今から祝賀会だけど一緒に来る？」と、ある宴会場まで誘ってくれました。実はその日、深谷君の教職員卓球選手権全国優勝の祝賀会当日だったのです。会場では以前お世話になった多くの卓球関係者にも再会でき、最高の時間だったのですが、さらに驚いたのは深谷君が決勝で破った相手で、あの水谷隼に次ぐ８度の全日本制覇を果たした知る人ぞ知る名選手（斎藤清）を破っての優勝でした。卓球関係者なら、十二分に驚いて頂けるエピソードなので、この拙稿を読んで下さっている皆様も、母校卓球部の全国的に使えるエピソードとしてご記憶頂ければ嬉しい限りです。

さて、話を戻し、高校時代には想像出来なかった現在の姿の方ですが、ずばり、サラリーマンになっていなかったことです。保険会社員だった父や兄の影響で、大手志向や安定指向が人一倍強く、一度は大手組織設計事務所というサラリーマン設計者の道を選んだのですが、今は個人としての建築設計事務所経営。本当に自分でも意外な現在だと思っています。振り返れば、大学時代に修行のために選んだバイト先は全てアトリエ系と言われる個人の設計事務所ばかり。今、最も有名な建築家の一人である隈研吾先生の事務所もその一つで、当時はまだ青山の小さな木造住宅を借りてエネルギッシュに仕事をされていたその姿を本当にカッコいいと思っていたので、独立する自分の姿は具体的には想像できていなくても、知らず知らずのうちに憧れ続けてきた方向に進んで来たものと最近は感じるようになりました。

実社会におどおどしながらも、なんとか好きな仕事に流れ着いたような半生の私ですが、中高一貫校やスーパーサイエンススクールなど新たな局面を生きるこれからの安高生に心からエールを送り、新しい社会のエンジンになるような後輩がより一層活躍する姿を陰ながら見守り続けたいと思います。

母校創立140周年
～私と合唱部のつながり～

小林 伸久（84期）

令和５年８月25日、私はサントリーホール大ホールにいました。「湯浅譲二　作曲家のポートレイト―アンテグラルからの軌跡へ―」というコンサートでした。終演後拍手の嵐の中、奥様に手を引かれてステージ上がった60期の湯浅先輩が観客の歓声に何度も手を振って応える姿がそこにありました。以前、東京桑野会の総会で記念講演をしていただいた時、合唱部だったことを話したら「安積の合唱部は僕が作ったんだよ」と誇らし気に話してくれた事を覚えています。

私は旧市内の喜久田中出身です。中学生の時はバスケットボール部でし

た。当時、喜久田中には体育館が無く、校庭にバスケットのゴールが設置されていて、屋外の練習でした。卒業の年に待望の体育館が完成、最初のイベントは郡山四中とのバスケットボールの試合でした。その後安積でもバスケットボール部に入りました。当時の三年生は東北大会で、あの強豪、能代工業に次ぐ東北二位の実力がありました。一年生の秋の大会で郡山市内では優勝しましたが、二年生との間がうまくいかず、ほぼ一年生全員が退部しました。その後帰宅部となっていた二年生の世界史の授業で、村上修先生から「君たちの中で部活やっているひとは手を挙げてみろ」と言われ、クラスで二人ぐらいが手を挙げました。すると村上先生は「君たち、安積に何のために入ってきたんだ。受験の為か？そうじゃないだろう。一番大事な事は、安積での３年間で生涯の友を見出すためなんだぞ。そのためには同じ目的で一緒にできるクラブ活動が一番近道なんだぞ！」と授業をストップして説教してくれました。その後わがクラスからは多くのクラスメイトがいろんな部活入って活動する事になりました。私も以前から興味のあった合唱部に入りました。

当時の合唱部は部員も少なくて、いつも、大会等では参加賞だけ頂いているような寂しい状況でした。そんな中、合唱部を取りまとめてくれたのは同じ学年の部長、鈴木茂明くんです。当時、彼の家は静町にありました。３年の時休んでいるとの話を聞き、部員の仲間と連れ立って顔見に行った事がありました。結局彼はピアノの前に座ると歌い始め、そのうち歌唱指導になるのが常でした。当時の音楽室は本館一階の端にあり、その奥の階段下に狭い部室がありました。そこで部員と話しているうちに授業が始まってしまい、息を殺して隠れていたこともありました。また、当時あった合宿所を利用して一泊で練習をした事もあり、そんな時には先輩が顔を見せてくれたり、部員のお姉さんで安女の合唱部OGの方から差し入れを頂いたりもしました。彼は音大に入るためにたびたび東京に通っていて結構大変だったと思います。そのかいあって国立音楽大学声楽科へ入学されました。彼の西武立川駅近くの下宿にも遊びに行った事もありますが、当時の西武立川駅前は畑に囲まれて郡山よりのどかな感じで驚きました。彼はその後国立音大の大学院ドイツリート専攻を修了。その後合唱の指揮を任されるようになり、開校したばかりの筑波大学混声合唱団の常任指揮者となり、その後OBが中心となって発足した混声合唱団コーロ・ソフィア、女声合唱団コーロ・コスモスその他の指揮、ヴォイストレーナーも務めており、高田三郎合唱作品の演奏にも力を注ぎ、イタリア、フランスでも混声合唱団コーロ・ソフィアを率いて演奏会もしてきました。また、自身でも歌い続けており、今年の賀状には５月11日（土）18時、紀尾井ホールで、リサイタルを開催とありました。応援に行きたいと思います。

安積を卒業してからの私ですが、実家は裕福ではなかったので、朝日新聞の奨学生となり４年間新聞配達をして大学を卒業しました。早稲田ではフォークソング同好会に半年ほどいてその後は同期の合唱部メンバーのコンサートに応援に行くぐらいでしたが、卒業の年に、同じ合唱部だった柳沼秀俊くんから一緒にバンドを組んで卒業コンサートをやらないかという提案があり池袋にあるシアターグリーンでやりました。彼とは安積卒業時にも同じ提案があってうすいデパートで赤い鳥のコピーバンドで演奏した経験もあり再度の演奏でした。彼は今は福島県フォークソング協会郡山支部の有力メンバーとして活躍中です。

その後の私はいろいろな音楽に挑戦。ゴスペル、ラテン、ブラジル、アフリカンの各パーカッション、フォークソングバンドと広く浅く音楽に親しみ、平成25年２月に墨田区主催の「第29回国技館5000人の第九コンサート」に初参加しました。これは現在も所属しているゴスペルチームのコンサート時にキーボードでサポートしてくれた女性から誘いで参加したものです。それから７年連続で参加、８年目はエントリーしたもののコロナで中止になり、今年再開されたので今、猛練習中です。そして昨年12月の墨田区のリバーサイドホールでの練習時に指揮者として集まった300人ほどの合唱団を指導してくれたのは何と安積合唱部の後輩の116期の麻山晧太くんでした。そして今年の２月18日には両国国技館で4,300人の仲間と一緒に第九を歌う事になります。音楽は素晴らしい！「ノーミュージック！　ノーライフ！」

孝和建商株式会社　総務部　相談役

安積高校での合唱との出会いとその後のライフワークとしての展開と開拓

麻山 皓太（116期）

憧れであった安積高校に入学し、真っ先に向かったのは、入部を心に決めていた剣道部の武道場でした。しかし、紆余曲折あり合唱部に入部することに。この決断とも言えないような判断が今の生活へと繋がることになりました。

合唱に対しては地味で堅いイメージを持っていましたが安積の合唱部は違いました。先輩方はハツラツとし、男気とユーモアがありかっこよく、自主自立的な部の雰囲気にも惹かれ、初心者だったのにも関わらずのめり込んでいきました。

合唱部顧問、五十嵐良枝先生と出会えたことも大きな幸運でした。勝った負けたの優劣競争になりやすい高校における部活動ですが、先生は「コンクールの結果に大きな意味はない。音楽はもっと素晴らしいものだ」と、繰り返し自然体で教えてくださいました。自由に楽しみながら先生と音楽をした結果、最後の男子学年である私たちが３年生の時、初めて全国大会金賞を受賞しました。結果に対しての喜びや充実感は非常に大きいものでしたが、決して燃え尽きることなく、更なる活動への展開に自然とモチベーションを繋ぐことができたのは、先生の教えのおかげだと思います。音楽室にはたくさんの素晴らしいCDがありました。その中で生涯の恩師となる栗山文昭先生を知り、かなり背伸びをした受験をし、栗山先生が指揮者兼音楽監督を務める千葉大学合唱団に入団しました。

栗山先生は「知らないことは罪だ」

と繰り返し語られ、毎年世界や日本の戦跡をめぐる演奏旅行を行なっていました。私が入学した年の夏にはアウシュビッツ収容所を訪れました。初めての海外、かつ、大学１年生の私にとっては色々と大変な旅行でありましたが、現地を訪れた時の衝撃、その後の演奏の感覚は生涯忘れることはないでしょう。また、大学３年生の時には、私が実行委員長となり郡山で演奏旅行をしました。五十嵐先生率いる安積高校合唱部が賛助出演をしてくれました。千葉大学の演目は、蓬莱泰三台本、池辺晋一郎作曲の「タロウの樹」。戦争の悲惨さを直接的に訴える、演劇要素の入った作品です。聴衆からは、大学生らしくない、観ていて辛い気分になる、といった意見も聞かれ、賛否ある舞台となりましたが、この共演をきっかけに、後輩たちが私と同じように千葉大学合唱団に入団したり、栗山先生が指揮する他の合唱団に所属し、今でも多くのメンバーが仲間として一緒に歌っています。そのうちの一人は縁あって義理の弟になっています。

また、大学を卒業し損なっている最中においては、ユネスコ大使でもある「世界青少年合唱団」に参加し、欧州各国や、南アフリカ共和国での演奏旅行も経験しました。文化や考え方の違う同世代と様々議論を交わしながら濃密な時間を過ごしました。

大学を何とか卒業した後は、船橋市に奉職しながら栗山先生が指揮をする合唱団の集合体「栗友会（りつゆうかい）」の社会人合唱団に所属し活動を続けています。この「栗友会」に所属する合唱団は、35歳以下の若手のグループから、平均年齢が80歳近い女声合唱団まで、まさに老若男女、職業も思想も様々な人々が全国から200人ほど集っています。

活動内容は、自主公演をはじめ、日本全国での演奏旅行、新日本フィルハーモニー交響楽団との共演、久石譲さんとの映画音楽の録音など様々です。また、合唱オペラという新しい表現方法を模索し、演出家の方と日々稽古を重ねていたりもします。アマチュア集団でありながら、このように多様に活動する集団は世界的にもユニークかもしれません。

ある演奏会では、安積高校の先輩で、日本を代表する作曲家である湯浅譲二先生の作品を演奏することとなり、安積出身のメンバーで先生を囲んでお話することができました。学徒動員時に遭遇した空襲の話は本当に生々しく、今でも重く心に残っています。

加えて近年の私個人での活動としては、2015年にTokyo Cantat主催「若い指揮者のための合唱指揮コンクール」において第１位をいただき、それまではあくまで合唱団員としてだったのが、合唱指揮者としての活動も増えてきました。本職は船橋市の環境行政ですが、公民館等でのコンサートを企画演奏したり、同世代作曲家との共演、一昨年はオペラの指揮も経験しました。また、両国国技館で開催される「すみだ5000人の第九」においては練習指揮も担当しています。

今回、原稿執筆の機会をいただき安積高校時代を改めて思い返し、今の自分の礎となっているのは、伝統を重んじながらも変化を恐れない開拓者精神であるかもしれないと感じました。私の活動はいわゆるプロ音楽家の活動とは大きく異なっておりますが、今後も合唱を一つのツールとして、自分独自の世の中との関わり方を模索し行動していきたいと考えています。

改めて今回いただいた機会に感謝し、東京桑野会140周年のお祝いを申し上げます。

ホームページのSSL暗号化通信への転換

―安全と安心のために―

https://www.tokyo-kuwano.jp/

芳賀　雅美（86期）

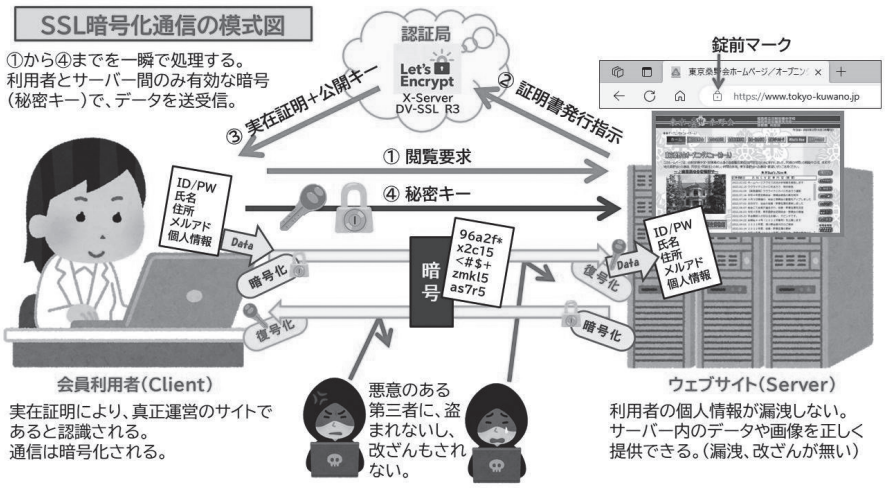
（東京桑野会ホームページ委員長）

本年は母校創立140周年の記念の年である。また昨年2023年はホームページを開設し、20周年を迎えた。ホームページを運営する側としては、苦節20年の困難な時期もあったが継続することで皆さんのお役に立てたのであれば喜ばしい限りである。さて遅きに失するところではあるが開設20年を経過して、やっと安全で安心してホームページを利用していただくためにSSL暗号化通信へ転換する運びとなった。悪意のある第三者による情報の抜き取りやアカウントの乗っ取り、不正な大量メール発信の土台にされたり、詐欺サイトへの誘導による金品の搾取や身代金要求の脅迫など、サイバー犯罪は手を変え品を変えて攻撃を繰り返している。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が重なり、サイバーテロは際立った動きになって白昼堂々の押し込み強盗のようになってしまった。この機会にSSL化と同時にホームページのホスティング先とURLの変更も実施したので報告する。

SSL暗号化通信の設定は2023年９月16日に完了し、作動検証や一部プログラムの修正を経て無事に皆さんにリリースすることができた。実行に当たりホスティングプロバイダー（サーバー管理会社）を変更し、独自ドメインを新たに取得してサーバー内データの引っ越しを行った。現状では問題なく稼働しているが、利用者の皆さんから不具合の報告があれば修正していきたいので、気軽に事務局へ連絡をお願いしたい。新URLは、最後が「.com」だったものを「.jp」に変更したものであるが、郡山の安積桑野会と歩調を合わせた。またSSL化されたことで、最初の「http://」が「https://」と「s」が追記されているのでご注意願いたい。旧サイトのURLではもう接続できなくなっているので、もしブラウザのお気に入りに旧URLを登録されている方は新サイトのURLに更新をお願いする。

以降少し技術的な話になるため興味のない方は読み飛ばしてもらっても結構だが、当会の対応を述べていきたい。SSL暗号化通信の仕組みを別添の模式図で示す。SSLとは「Secure Socket Layer」の略で、インターネット上でデータを暗号化して送受信する仕組み（プロトコル）のひとつである。暗号化だけでなく、ウェブサイト組織の実在証明を兼ねている。実在証明書は「tokyo-kuwano.jp」ドメインに対して、米国の非営利団体である「Internet Security Research Group（ISRG）」により運営されている認証局のSSL証明書が付与されている。証明書の有効期間は90日であり、60日を経過するごとにドメインの再審査を実施して更新される仕組みである。通常「Let's Encrypt R３」と呼ばれている2021年10月にリリースされた証明書のバージョン３である。この公的認証局による当会ホームページサイトの認証は2023年９月14日に承認され、何度かの再認証を受けて自動継続している。最初の証明書取得とインストールに手間取ったが、あとは自動で更新されるので楽だ。

SSL暗号化通信設定によって従来と何が違っているのか詳述したい。まず気づくのはURLの表記が変更になったことだ。新しいURLは「https://www.tokyo-kuwano.jp」である。「www.」は省略できる。クリックすると新サーバーでのホームページが開くが、サイト画面の見掛けは全く変わっていない。データ通信が暗号化されていることは、一般のサイト閲覧者は気づかない。従って会員の皆さまには、SSLなどと考えることなく従来通りにアクセスしていただければよい。最大の相違は通信が暗号化されたことにより、悪意のある第三者によるデータの「盗み見」、「搾取」、「改ざん」、「差替え」等のリスクが大きく低減されたことである。特に個人情報の漏洩を防止できることが大きな利点となった。会員登録・変更届のデータについても、安全に安心して入力し送信できることになった。さらにこれは我々運営側のメリットになるが、サイト内の検閲や監視業務の省力化である。毎日、朝晩と眼を皿のようにしてサーバー内の監視をする必要がなくなった。また大手のホスティングプロバイダーに変更した



ことで、より運営業務の省力化につながるサービスを甘受できることも分かった。SSLにして良かった良かった、万々歳なのである。

SSL化技術が世界グローバル標準となったのは2012年のことであり、技術力も向上し毎年のようにきめ細かくバージョンアップされている。当会のホームページを立ち上げた時にはまだ存在しなかった技術で、ISRG認証局を選定して導入したことによりその工程作業において当会に良い経験となった。個人的には私のITスキルアップとなった訳であるが、若手の後継者に引き継いでいきたい。

ホームページとは、閲覧する人すなわち「一般の利用者」(クライアント)と、ホームページプログラムやデータを保管しているサーバーとを公衆回線を通じて双方向に通信して情報の提示・交換を実施している仕組みである。この通信は誰でも傍受できるため、悪意のある第三者は盗み取ったり改ざんしたりできることになる。そのため、情報を守る目的でSSL化技術が誕生した。すなわち、クライアントとサーバー間の通信を当事者にのみ解読できる暗号で送受信しようというものである。また当該ホームページ(ウェブサイト組織)側について、公的機関(認証局)の実在証明書を発行することにより、クライアントは真正サイト保証を得ることになる。第三者のハッキングを防止し、安全で安心して閲覧できるという利点がある。

当会ホームページは2003年3月のグランドオープン時より不特定多数の一般に開放したため、当会会員や安積高校関係者だけではなく誰でも自由に閲覧できる環境にあって、現在もいわゆるフリーアクセスの状態になっている。利用者が会員や不特定の第三者であっても、単純に頁の閲覧だけを実施しているのであれば問題は発生しない。自由に書き込みができる掲示板を設置しているが、一般会員が書き込んでこれに応答するのであればよいが、本来の目的外に悪用されてしまった。偽ブランド品販売サイト、違法なドラッグ斡旋サイト、金品の搾取を目的とした詐欺サイト、アダルトサイトなどの危険なURLを書き込んだ投稿が急増し、うっかり一般会員がこれをクリックするとウイルスを送り込まれたり、個人情報を抜き取られたり、挙句の果てに金銭の搾取に遭ってしまう。悪意を持ったサイバー犯罪である。最初の内は私が毎日検閲し、違法な書き込みはせっせと削除していたが、1時間に1回、そのうち1分間に1回と掲載頻度が急上昇し、削除が追い付かなくなった。ロボットによる自動投稿である。IPアドレスを突き止めプログラム上で投稿禁止リストに上げるも、相手は次々とIPアドレスを変更して攻撃してくる。そこでロボット投稿の特性を利用し、掲示板プログラムの変更を実施した。さらに掲示板プログラムがロボット自動巡回に見つからないように、METAタグに回避コマンドを打った。これでロボット検索による掲示板巡回を回避できたことは効果が大きかった。さらにスパイダーロボットによる情報収集を抑制するため、メインルートのディレクトリーに「robots.txt」を埋め込み対策とした。非SSL化状態でも機能し、ある程度のサイバー攻撃から守られていたはずであった。ところが2019年3月12日に当会のメールサーバーが突然乗っ取られ、世界中に大量の不正メールが発信されてしまった。直ちにプロバイダーからの連絡でサーバーを停止し、メール発信を遮断するという大きな事件になった。IDとパスワードを解読されてしまったことが原因であった。また同年9月6日から7日かけて、サーバー内の写真データが大量に抜き取られる事件が発生した。目的が分からないが悪意がないことを祈るばかりである。画像数にして23万枚余りはある。同じ写真を数千枚ずつダウンロードしているが、総会・懇親会の写真に集中していることも気になる点である。その他にもクリックボタンや文字・ロゴデザインも6万7千枚ほどがダウンロードされていた。これも人間業ではないので、ロボットによる自動抜粋と考えられる。もちろんIDやパスワードは全て変更したが、対策のしようがないのも問題であった。このころからSSL暗号化通信によるセキュリティー強化を提唱してきたが、当会内での理解が進まずコロナ禍と重なって検討が先送りになってしまっていた。

母校創立140周年を迎えるにあたり、記念事業の一環としてホームページのSSL暗号化通信を見える事業のひとつとして取り上げ、昨年の役員・幹事会にて了承され会長の承認を以って実行に移されたのである。ここにたどり着くのに20年もかかってしまったことは、運営側としての不手際であり深く反省する次第である。まことに申し訳ない。

とにもかくにも当会ホームページの通信はSSL暗号化され、従来と比較して格段に安全性は増大した。経費を掛ければもっとセキュリティー強度の高いサービスを受けられるが、会費を徴収して運営している当会にはあまり金銭的な余裕はない。残念ではあるが、資金面や人的リソースが圧倒的に劣る我々の状況に対し、世界の優秀な？ハッカー達はその遥か上を行く。いつかは安全性を突破され、悪意のある攻撃が始まるかもしれず、今回のSSL化対策も「いたちごっこ」の一時的な気休めかもしれない。古希を迎えた爺さんひとりがいくら頑張っても、世界の若手ハッカー集団に太刀打ちできるはずもなく、分っていながら対策のしようがないのが現実であることをご理解いただきたい。我こそはと思う会員の方は、ぜひ防衛隊に参加されたい。

30代でのイギリス修士課程留学

山崎 史香（118期）

私は2022年9月から2023年9月までイギリスのリーズ大学に留学し、国際コミュニケーションの修士号を取得しました。現在は国連大学のグローバルリーダーシッププログラムで学びながらUNICEF東京事務所でインターンとして働いています。留学の経験を共有する機会を頂きありがとうございます。30代で海外の大学院で学び直してくるのは少し珍しいかと思いますので、そんなチャレンジをしている人もいるんだと、どなたかが明るい気持ちになって頂けたらうれしいです。また、歴史のある安積高校の先輩方や仲間の卒業生の皆さんとどこかで交流するのを楽しみにしています。

私は安積高校が男女共学になって2年目に入学した118期生です。高校卒

業後は明治大学に進学し、フランスへの交換留学を経て、卒業後はメディア業界で10年以上働いてきました。報道番組を扱う制作会社に所属してテレビ朝日ではニュースの映像編集を担当し、フジテレビと系列の北海道のローカル局UHBでは記者として、テレビ局で合わせて８年ほど働きました。その後は出版社で英語の教科書の編集をしていました。今振り返ると、30代のこのタイミングで留学したのは、社会での経験を通して気付いた課題について学び直したいという意欲が出てきたことや、新型コロナウイルスの感染が広がったときに自由に人と交流するのが難しい状況を経験して、直接人と交流し見聞きすることの大切さや喜びに気付き、外に出たいという気持ちが高まったことも大きく影響したと思います。人生は一度きりなので、チャレンジする勇気があってよかったと思っています。

イギリスの修士課程は１年で授業の単位を取りながら自分の研究論文を仕上げたので、これまでの人生で一番勉強したかもしれません。リーズ大学には世界中から学生が集まっていて、私の学部の大学院では日本人は一人だったのですが、イギリスの他にもインド、中国、エクアドル、インドネシア、韓国、ハンガリー、アメリカ、アイルランド、ウガンダなど、多様なバックグラウンドを持つ学生たちと共に学びました。毎週授業ごとに出される課題の大量の論文を読み、ゼミの議論や発表の準備をし、学期ごとにいくつもエッセイを書き上げるのは大変でしたが、講義や文献から世界の研究やメディアやコミュニケーションの分野の課題やトレンドを学び、先生や学生たちと意見を交換し合うのは素晴らしい学びになりました。自分のアウトプットする発言やエッセイが、外国で英語でやりとりをしても評価されたことは自信にもなりました。研究者たちの知識や教養の蓄積の価値を実感したので、今後もいつでも論文や研究から学ぶ姿勢を持ち続けたいと思っています。

修士論文では、変化しているメディア環境の中で、国境を越えた課題についてこれから社会を作っていく若い世代にどのように伝えていけるのかを研究しました。SDGsに代表される、環境の問題や自然災害、平和や人権、教育の機会など、自分たちのコミュニティだけでなく国境を越えて解決していくべき地球規模の課題や解決策を、どのように広く伝えていけるのかを知りたいと思ったからです。私はテレビや出版という伝統的なマスメディアで働いてきて、社会で起きていることをニュースで伝えたり、教科書作りで子どもたちの学びに貢献したりすることにやりがいを感じてきましたが、日本も世界も人々が情報を得る手段は伝統的なメディアの新聞や出版物などからソーシャルメディアなどのインターネットに移ってきています。個人が自由に発信できるのは素晴らしいことである一方で、インターネット上の情報は自分がフォローしている情報や閲覧履歴などからおすすめされる情報に偏ることがあり、言論の分断が起きていることに危機感を感じてきました。論文では、関連する先行研究についての考察に加えて、明治大学の学生にアンケートやインタビューを行い、若い世代の国際ニュースに対する意識についての新しいデータを収集・分析して、考えられる解決策をまとめました。論文は長いので全てを紹介することはできませんが、調査結果からは、若い世代が国際的な情報を得られる環境を整えれば、彼らが国内のニュースと同じくらい国際ニュースについて関心を持つことがわかりました。BBCやアルジャジーラ、CNN、ニューヨーク・タイムズなどの海外のメディアの記事と、日本の国内の記事のタイトルをランダムに提示して読みたい順にランク付けしてもらったところ、全体としては国際的なトピックに関する記事についての興味の数値は国内の記事とほぼ同じでした。一方で、彼らはなじみのない話題は自分には関係ないことと感じ、そのニュースを読みたいと思わないという傾向があります。日本のメディアではなかなか取り上げられない地域にも目を向けられるように情報を提供することや、世界のどこかで起きていることと日本にいる自分の行動や自分のコミュニティの状況とのつながり・影響を丁寧に伝える工夫が、地球規模の課題を伝えるためには大切です。また、調査参加者（18歳～20代）が最もニュースを得ている手段はおよそ半数がTwitterで、新聞と答えた人はゼロであり、若い世代へ情報を届ける方法や配慮が必要です。

私の研究は、イギリスのリーズ大学を含む地域のサステナビリティに関連する研究会議（Student Sustainability Research Conference 2024）の発表に選んで頂き、今年３月に「ニュースを通して若者にグローバルな課題に関心を持ってもらうために大切なこと：日本の事例（The Keys to Engaging Youth with Global Issues Through News Stories: The Case of Japan）」というテーマで、研究成果をまとめた報告をする予定です。今後は、現在参加している国連大学のプログラムで様々な国の参加者と意見交換をし、そしてインターンをしているUNICEFのコミュニケーション・アドボカシーチームでの仕事を通して学びながら、これまでの経験や留学での学びを社会で生かしていきたいと思います。

両利きの授業

後藤　大（107期）

みなさんは、日本という国の形が、これからどうなることを望んでいるだろうか。超少子化と超高齢化が進み、人口が減少し続ける。人口ピラミッドが逆三角形になっていく中で、どのような人材が日本に必要なのか。

個人的には、超少子化は解決のしようがない問題であり、労働人口の減少に伴う経済の衰退を甘受するか、移民を受け入れるのか（超高齢化は、超少子化を受けた結果に過ぎず、対策ができるようなものではない）。第三の道として、経済の衰退に抗おうとするなら、経済を活性化することができるリーダーシップがとれる人材が必要だ。

では、経済を活性化することができる人材はどのような人材なのか。その答えは、何が経済を活性化する要因なのかを考えることにある。経済は、市

株式会社開成プランニング　代表取締役
(http://www.kaisei-planning.co.jp)

和田 正哉（77期）

〒102-0073　東京都千代田区九段北3-2-2
勤務先電話：03-6261-0161
FAX：03-3938-0073
携帯　：080-2929-1428
e-mail: wada@kaisei-planning.co.jp

本田　宏（86期）

NPO法人医療制度研究会　理事長

hondahiroshi@me.com　090-3205-9482

樹液を吸い取る政治
医療・社会保障充実を阻む
ものとの訣別へ
（あけび書房）1800円＋税

短編映画
公的医療はどこへ行く
差し迫る医療崩壊
Vimeo 1000円

労働保険の特別加入
1人親方労災保険加入のご用命は！
労働保険事務組合
神奈川ＳＲ経営労務センター
顧問　佐藤 重夫（79期）
（特定社会保険労務士）
事務局 〒231-0005 横浜市中区本町4-36
朝日生命横浜本町ビル8F
TEL：045-212-5269
FAX：045-212-3177
http://www.kanagawa-src.gr.jp

場における取引量が増大することで活性化すると仮定すると、既存の商品・サービスについて需要を増やすか、新しい需要を創造する商品・サービスを世に出すことで需要を増やすことになるだろう。既存の商品・サービスに対する需要は、超少子化を前提とすると、増加は期待できない（国内市場に限っての話であり、海外展開をしていけば、また事情は変わるが）。そうすると、新しい商品・サービスを創造できる人材が、これからの世の中に求められているのではないか。

と、日頃、スタートアップの支援をしている視点から、今の日本に求められる人物像を考えてみた。これは、あくまで個人の意見であって、様々な意見がありうる。ただ、ここで大上段にこのような話をしたのは、母校が創立140周年を迎えるとともに、福島県における公立の中高一貫校となるからである。

自分の子ども時代を振り返ってみると、小学校の高学年は学校に行きたくなく、中学校に進学するために特別な勉強など一切せず、中学時代は、ろくに授業も聞かず、図書館に入り浸り、友達と帰り道にたわいのない話を遅くまでしていた。勉強をしろと言われれば、したくなくなる天邪鬼な性格。東京で、塾通いに苦しんだ自分の子どもの中学受験の様子を見た経験からは、自分が牧歌的な子ども時代を過ごせたことはありがたいことだし、よく高校に入学できたものだと思う。それでも、母校の自由闊達なバンカラな校風は新鮮で、楽しい高校時代を過ごすことができた。

話は唐突に変わるが、東京都の公立中高一貫校の中等部に模擬裁判の授業で出かけたときのことである。模擬裁判も終わり、ざわつきが収まらない生徒に対し、先生から、東京都初の公立中高一貫校の生徒として恥ずかしくない行動をするように、と注意する場面に遭遇した。

中学１年生から高校３年生までの６年間、思春期の真っ只中で、子どもから大人になっていく（そういえば成人年齢も18歳になった）後輩たちに対し、学校側の思惑を一方的に押しつけるのではなく、また、驕りや選民思想的な感覚を抱かせるのではなく、生徒が自由闊達に過ごせる環境を提供することはかなりの難事業だと思うが、中高一貫校が実現する以上、開拓者精神をもって学校、生徒、その他の関係者（我々も含まれる）が新時代の安積を作り上げていくことを切に願う。

世はAI全盛の時代である。スマートフォンからアルゴリズムで選別されたニュースが流れてきて、多様な観点から物事を見ることができない人を育てるのではなく、他者の個性を尊重し、多様な意見に接し、コミュニケーションを厭わない、芯のある人材を輩出する中学・高校になってもらいたいと思うし、そこで友人や仲間と出会い、様々な経験をすること、同じ校風の下で学んだ先輩や後輩を得られることがかけがえのない財産なのではないかと思う。

さて、ここで話が終われば、きれいにまとまる気がするが、以下蛇足である。両利きの経営ということが言われている。簡単に言ってしまえば、既存事業の深掘りと新規事業の開拓のバランスをとることが企業経営において大事だという話である。そして、新規事業の開拓をしていくためには、新しい商品・サービスを創造できる人材が必要だとして（ようやく冒頭に話が戻る）、中学・高校でどのような体験があればいいのか、私論を述べたいと思う。

これまでの学校教育が、既存の科目の深掘りという形で作られているのであれば、新規事業の開拓に相当する授業が必要ではないだろうか。少人数のグループの中でひとつの目標に向かって、自分やメンバーの個性を活かしながら、スモールリーダーシップと小さな失敗と小さな成功体験を数多く積み重ねて、合目的的な思考力と行動力を養うプロジェクト型の授業だ。必ずしも正規の授業内ではなく、課外活動でも良いが、中高一貫校だからこそ、柔軟なカリキュラムが組めるはずであり、そのような体験を通じて、世の中を変えていく人材が輩出されることを期待する。

「日本の禍機」との出会い

樽井 保夫（77期）

朝河貫一博士についてはこの会報でも度々取り上げられ、様々な角度から紹介されていますので、ここで詳しく触れる必要はないと思います。しかし、卒業以来約半世紀の間、特に接点のなかった私と母校との間を再び結びつけてくれたのが「日本の禍機」でしたので、その出会いを中心に紹介させて頂きます。

「日本の禍機」については改めてご説明するまでもありませんが、朝河博士が1909年に唯一日本語で執筆し、日本で出版した、当時の日本の指導者に向けた警世の書です。終生民間企業に籍を置き、博士について殆ど知識も持ち合わせていなかった私がどの様な経緯でこの書と出会い、母校との縁が復活したのか、その経緯は下記の通りです。

2014年の東京桑野会総会に出席した折、講演された当時の古川清会長が博士について幾つかのエピソードを紹介された最後に、「日本の禍機」は皆さんに是非読んで欲しい、と話されたのが私の耳に残りました。

その後、八重洲のブックセンターで講談社学術文庫の中にこの本を見つけた時は心が躍り早速購入しました。読み始めたのは良いのですが明治の知識人による文語体の文章は専門的な勉強をしていない私にとってなかなか手強いものでした。数日経過しても頁が進まない進捗状況に情け無さを感じながらも粘り強く読み進めていく中に、頭の中で現代文に置き換えながら読んでいることに気付いたのです。それなら頭に浮かんだ訳をそのままパソコンに残しておこう、それを再度読み返せばこの本の理解が深まる、と考えパソコンに向い始めました。

4ヶ月程かけて何とか訳し終え、訳文を改めて読み返して見ると、その内容が現代でも色褪せない示唆に富んだものであることに改めて気付かされました。不完全なままでしたがここまで

21世紀をリードする
安積SPIRIT!

浅川　章（76期）

〒338-0821さいたま市桜区山久保2-18-3
電子メール：chobi@hyper.ocn.ne.jp

山田・合谷（ごうや）・鈴木法律事務所

弁護士 鈴木 修一（89期）

〒100-0012
東京都千代田区日比谷公園１番３号
市政会館１階１１５号室
TEL:03-3501-0451
FAX:03-3501-0452
E-mail:shuitisuzuki@nifty.com
http://www.yamada-law.gr.jp

むさしのきずな法律事務所

代表弁護士 安孫子　哲教（115期）

〒180-0003
東京都武蔵野市吉祥寺南町2-2-5
アスコーナミエビル6階
E-mail: abiko@m-k-lawoffice.jp
TEL: 0422-662-2921 / FAX: 0422-662-2923
是非お気軽にご相談ください！

来ると人に読んで欲しくなるのが人情です。郡山に帰省した折に安積歴史博物館の受付に持参し「ご参考になれば」と係の方にお渡しして帰りました。

数日後安歴博の関係者の方からお電話を頂き、原本は難解で数頁で投げ出したが、この訳は読みやすく自分にも理解できた、と感謝の電話を頂きました。更に安高の校長を務められ、「100年前からの警告」の著書もある梅田秀男先生から「本として出版してはどうか」とのお勧めの書簡を頂きました。その後、本の紹介者である古川会長に原稿をお送りしたところすぐに電話があり、「朝河貫一博士顕彰協会で出版したい」との申し出を頂きました。そして、当時の福島テレビ糠澤修一会長が中心となり、出版の実務を取り仕切って頂くこととなり、編集会議を重ねることとなりました。更に専門的見地から朝河研究の第一人者である横浜市大名誉教授、矢吹晋先生にご指導頂く機会にも恵まれ貴重なアドバイスを頂くことができました。私自身も博士の業績とその生涯について深く学ぶ機会に恵まれたと同時に、この機会に明治維新から昭和までの通史を学び直すという充実した時間を過ごすことができました。

このような経過を経て2017年「現代文で読む日本の禍機」として完成した本は、糠澤会長のご尽力もあり県内マスコミにも取り上げて頂き、各方面からご評価を頂きました。読み返して見ると手直ししたい部分も散見されますが、入門書としては格好の本に仕上がったと自負しています。私にとって本の出版は大きな出来事でしたが、それにも増して何よりも貴重な出会いに恵まれた素晴らしい時間でした。ビジネス以外の世界に縁の無かった私が外交、学問、マスコミ等各界で業績を残された母校の先輩に卒業後50年以上経過した後に知遇を得ることができたのも、まさに安積高校だからこそだと思います。そしてこの貴重な機会を与えてくれた「日本の禍機」に感謝しなければなりません。

皆さんには古川前会長が外交官の立場からその価値を評価し、推薦して下さった「日本の禍機」に是非目を通して頂きたいと思います。国際秩序が音を立てて崩れつつある現在は一世紀以上前の出版当時の状況にも似ていると感じます。我々が我国の将来を考える上で大きな示唆を与えてくれる書だと思います。

最後に、私が拙い本を出版する機会を与えてくださった故古川前会長と東京桑野会、そして朝河貫一博士顕彰協会に改めて感謝申し上げます。

旧本館保存修理（災害修復）開始

（公財）安積歴史博物館業務執行理事
橋本 文典（84期）

旧本館保存修理工事（災害復旧）が始まりました。約三年前に発生した福島県沖地震により耐震工事の必要性が生じましたが、その準備がやっと整い、この度の着工となりました。

昨年十二月一日に工事業者の入札があり、郡山市の八光建設株式会社が落札し、文化財建造物保存技術協会から施工について技術指導を受けつつ、令和六年年明け早々から旧本館本体部分の工事が開始されました。

今回は土壁の補修を前に耐震施工を行うため、一度複数箇所の土壁を剥離することとなりました。そこで現れる内部の構造に耐震補強を施し、再度土壁を塗り込む工程を経て終了となります。同時に、基礎にも耐震補強を実施します。耐震試験の結果、大きな揺れの際に基礎石と建物土台にズレが生じ、建物自体が滑り落ちて倒壊の恐れがあるということがわかりました。その対策として、基礎石の内側にコンクリートを流し込み、建物土台と基礎石とを緊結することで、より堅固な建物に再構築する工事を行います。

また今回、基礎工事のため、床板を外す作業を行いますが、そもそもこの建物は解体することを前提に建てられていません。作業の前段階で巾木を外すことも容易ではありませんでした。そこでは機械的な切断をしてしまえば、文化財の破損となるため、一枚ず

つ丁寧に解体していきます。（写真①）

また先の東日本大震災後の工事と同様、土壁は表面の漆喰を剥がした後で、剥がした素材を分別して再利用します。その素材は敷地内で保管しますが、その場所は、湿気の影響を受けにくくする工夫も求められています。（写真②、③）

工事の完了は令和九年三月末の予定です。今までの保存修理とは異なり、工事期間は長期にわたります。その間の一番の懸念事項は、皆様から忘れ去られることです。そのため、福島県の補助を受け、「ここにある明治」というタイトルで動画を作成しました。（ホームページでご確認ください）来館できない期間は、せめて動画で建物の魅力を感じていただきたいものです。

がんばれ安積 がんばれ日本
渡邊 龍一郎（81期）
Watanabe Ryuichiro
〒170-0004東京都豊島区北大塚2-31-5-513
Phone：090-1429-6127
E-mail：watanabe2021@ryu.bz

あらゆる木質の床を心を込めて施工します。
OK工法（床工事・内壁工事）・鋼製床・乾式置床・フローリングボード
フローリングブロック・塗床・ネダホーム・OAフロアー その他一式工事
木質床（フローリング）施工
孝和建商株式会社
千葉市中央区汐見丘町16番12号
総務部 相談役　小林伸久（84期）
電話：043－245－4111　FAX:043－244－9550
携帯：080－2045－0962
E－mail：nobuhisakoba@docomo.ne.jp

晴海パートナーズ法律事務所
弁護士　後藤　大（107期）
マネージングパートナー
〒104-0045
東京都中央区築地2-15-19
ミレニアム築地6階
E-mail: gotodai@harumi-partners.jp
「晴海パートナーズ」で検索ください
TEL: 03-6264-1588 / FAX: 03-6264-1589

もう一つは資金の手立てです。目標金額は六千万円となりました。文化庁や福島県、郡山市からの補助金の対象は「建物」に限定されます。工事中の展示品の移動や保管、建具の調整や破損したカーテン等の補修については対象外です。桑野会を中心に寄附金募集を呼びかけておりますが、未だ浸透していないのが現状です。東京桑野会会員の皆様にも何卒厚いご支援をお願いいたします。

工事の進捗状況や寄付の方法については安積歴史博物館のホームページ等でお知らせしたいと思います。どうぞご覧ください。

令和５年度実施寄付金　寄付者ご芳名

今年5月、当会が実施致しました異例の特別寄付の要請に応えて多くの卒業生の皆様から御芳志を頂戴致しました。ここに、寄付者の芳名を掲載して謝意を表わします。

湯浅　譲二　59･60期
菅野　壽夫　63期
須賀　磐雄　63期
奥山　　実　64期
原　　信夫　64期
山本　　薫　64期
草野　諒一　64期
安永　　力　64期
井上　剛輔　64期
橋本　昌美　65期
戸屋眞一郎　65期
濱崎　洋光　66期
井上　　晃　66期
角田　祥夫　66期
佐藤　秀雄　67期
椎根　正信　67期
小川　幸佑　68期
山ノ井清蔵　68期
中村　七男　68期
五十嵐愛武　68期
誉田　正孝　69期
丸森　貞雄　69期
原瀬　久夫　69期
畑中　至純　69期
村上　信一　69期
宗像　秀夫　69期
鈴木　惇弘　69期
渡辺　哲弥　70期
小黒　邦雄　70期
福本　　功　70期
石森　康之　70期
菊川　久誉　70期
石黒　早苗　71期
相楽　光男　71期
武藤　勇司　71期
佐藤　英輔　71期
鈴木　祥布　71期
未記入　　72期
大越　髙紀　72期
安斎　昌敏　72期
増子　典男　72期
髙橋　久彦　72期
稲津　佳尚　73期
松野　撤朗　73期
熊谷　文憲　73期
関根　健治　73期
竹中　俊郎　73期
鈴木　冨義　73期
小畑　秀明　74期
村田　英男　75期
今川　直人　75期
橋川　隆夫　75期
星　　隆司　75期
熊田　志郎　76期
浅川　　章　76期
滝田　康雄　76期
神田　勝正　76期
藤島　磐根　76期
菊地　　白　76期
和田　正哉　77期
鈴木　駿介　77期
奥山　郁郎　77期
高橋　善也　77期
柳沼　一夫　77期
内山　邦彦　77期
間所　　学　78期
渡辺　恵樹　78期
橋本　道裕　78期
羽賀　則男　78期
山元　紀美　79期
増子　輝彦　79期
佐藤　重夫　79期
黒澤　利幸　79期
日下部　信　79期
上石　利男　80期
田母神俊雄　80期
佐藤　孝美　81期
秋田　　修　81期
渡邉隆一郎　81期
小林　正之　81期
伊藤　秀一　81期
本間　義昭　81期
菊田　利春　81期
山﨑　清博　81期
大橋　誠一　81期
大森　　博　81期
藤田　勝久　82期
根本　　匠　82期
石井　俊一　82期
牛山　雄造　82期
武田　和司　82期
円谷　晴男　82期
新城　俊憲　82期
佐藤　宗司　82期
佐藤　伸一　82期
山野邊由則　82期
相楽　秀光　83期
小川　裕二　83期
岩谷　俊行　83期
渡邉　朝紀　83期
丹内　一雄　83期
小林　伸久　84期
鈴木　茂明　84期
五十嵐信也　84期
渡辺真佐夫　84期
武藤比良志　84期
八木澤伸夫　84期
上野　恒彦　84期
菊地　弘美　84期
降矢　新治　84期
柳川　　聰　84期
石井　久義　85期
西垣　文男　85期
髙橋　　晋　85期
山根　道実　85期
佐藤　栄一　85期
三輪　美典　85期
阿久津哲夫　85期
箭内　　浩（弓爾）85期
芳賀　雅美　86期
鈴木　昌孝　86期
本田　　宏　86期
土屋　繁之　86期
橋本　正幸　86期
秋田　　調　86期
遠藤　高明　86期
吉田　聡一　86期
橋本健二郎　86期
関川　浩司　86期
渡邉　　宏　86期
柳沼　勇弥　86期
渡邉　富雄　86期
野内　達也　86期
馬場　雄二　87期
斎藤　隆次　87期
中村　博信　87期
相楽　達男　87期
緒岡　　暁　87期
佐々木信暢　87期
熊耳　要一　88期
鈴木　研一　88期
時長　一元　88期
角田　　勉　88期
大内　俊輔　88期
大矢　真弘　88期
渡部　和生　88期
今泉　公夫　89期
秋元　孝則　89期
鈴木　修一　89期
会田　陽彦　89期
大竹　勝也　89期
佐藤　和宏　89期
渡辺能理夫　89期
金田　　彰　89期
熊耳　隆広　89期
高林　　豊　90期
國分　敬一　90期
阿部美智夫　90期
上山　展弘　90期
國分　裕司　90期
矢吹　　久　90期
梅津　健一　90期
柳沼　亮寿　90期
野崎　　修　90期
匿名　91期　寄付金
渡部　良朋　91期
山﨑　　学　91期
萩野　秀嗣　91期
佐久間信一　91期
武田　孝実　91期
小菅　一宏　91期
前田　正史　91期
前田　一郎　91期
並木　信也　91期
武藤　健二　91期
鈴木　利典　92期
今井　厚弘　92期
田中　雄志　92期
千葉健三郎　92期
泉登　宏光　92期
宗像　　朗　93期
柏木光一郎　93期
斎藤　広海　93期
加藤　広幸　93期
髙谷　昌紀　93期
市原　明彦　93期
中井　弘徳　93期
高橋　秀和　94期
関根　久修　94期
山崎　正弘　95期
阿泉　浩一　95期
鈴木　直人　95期
吉田　弘倫　95期
髙橋　克尚　95期
柏木健太郎　95期
織戸　恒男　96期
永井　裕行　97期
小池　芳彦　97期
武藤　篤生　98期
安藤　忠司　98期
柳沼　宣幸　98期
塩谷　　格　98期
佐藤　顕彦　99期
大江　裕志　100期
小針　卓哉　100期
今泉　修一　101期
芳賀　純夫　101期
佐藤　彰洋　103期
菅野　直樹　104期
綱田　恒司　105期
川手　隆義　106期
須田　　栄　107期
関　　英夫　107期
石田　政雄　108期
宍戸　真次　109期
柳田　藤広　110期
青木　雄司　113期
成田　智彦　114期
本田　吉隆　116期
秋山　綾子　119期
（敬称略）

新神田法律事務所
弁護士　上石利男（80期）
〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町2-9-5　東園ビル7階
TEL03-3252-9671／FAX03-3252-9673
E-mail:shin9671@athena.ocn.ne.jp
新神田法律事務所

奮い立て我健男児
大矢 真弘（88期）

株式会社櫻井計画工房
取締役　一級建築士
櫻井 淳（78期）
郵便番号：231－0014
住所：横浜市中区常盤町2－10
常盤不動産ビル２F106
TEL: 045-663-9271
FAX: 045-663-9273

令和４年度決算報告書

（令和４年４月１日～令和５年３月31日）

		決　算　額	予　算　額
1 収入の部			
	（1）前年度繰越金	352,619	352,619
	（2）年会費収入	620,000	794,000
	（3）総会費収入	822,000	590,000
	（4）協賛広告料	290,000	260,000
	（5）受取利息	15	19
	（6）雑　収　入	0	0
	収入合計	2,084,634	1,996,638
2 支出の部			
	（1）総会懇親会費	878,646	800,000
	（2）通　信　費	10,808	20,000
	（3）会　議　費	0	0
	（4）会報作成費	342,760	342,760
	（5）会報発送費	244,127	256,535
	（6）事務消耗品費	94,380	100,000
	（7）母校後援費	0	0
	（8）冠婚葬祭費	0	0
	（9）支払手数料	51,952	70,000
	（10）人　件　費	0	120,000
	（11）交　通　費	0	0
	（12）名簿編集費	0	0
	（13）ホームページ・広報部会運営費	24,960	30,000
	（14）雑　　費	11,328	10,000
	（15）予　備　費	0	10,000
	支出合計	1,658,961	1,759,295
	次期繰越金	425,673	237,343

令和５年度予算案

（令和５年４月１日～令和６年３月31日）

		予　算　額
1 収入の部		
	（1）前年度繰越金	425,673
	（2）年会費収入	620,000
	（3）総会費収入	822,000
	（4）協賛広告料	290,000
	（5）受取利息	15
	（6）雑　収　入	0
	収入合計	2,157,688
2 支出の部		
	（1）総会懇親会費	880,000
	（2）通　信　費	20,000
	（3）会　議　費	0
	（4）会報作成費	342,760
	（5）会報発送費	244,127
	（6）事務消耗品費	100,000
	（7）母校後援費	0
	（8）冠婚葬祭費	0
	（9）支払手数料	70,000
	（10）人　件　費	120,000
	（11）交　通　費	0
	（12）名簿編集費	0
	（13）ホームページ・広報部会運営費	30,000
	（14）雑　　費	10,000
	（15）予　備　費	10,000
	支出合計	1,826,887
	次期繰越金	330,801

3 財産目録（令和５年３月31日現在）

A　特別会計

事業準備積立金　　定期預金（三井住友銀行）　568,040

B　現預金

（1）普通預金（三井住友銀行）　842,158

（2）郵便振替貯金　44,621

（3）現　　金　38,867

上記は監査の結果いずれも適正なものと認める。

令和５年５月４日

会計監査　宗　像　良　保

会計監査　首　藤　敬　勝

「旧本館西時計」吉田幸来（138 期）

石井綜合事務所

司法書士・行政書士

石井 俊一（82期）

〒104-0061東京都中央区銀座8-8-15
青柳ビル７階
TEL :03-3289-1411
FAX :03-3289-1422
E-mail：s-ishii@e-1411.com
http://www.e-1411.com

【協賛広告のお願い】

東京桑野会会報は、三千数百部を発行し、母校・安積高校や福島県立図書館などにも納入されております。“安積卒業生の心意気”を協賛広告で示してみませんか。

お問い合わせは事務局まで。

【会費納入のお願い】

東京桑野会の活動は、会員の皆様の会費によって支えられています。会報の作成・送付も会費によって賄われています。現在、会報を送付している会員からの会費納入の達成率が低迷し、東京桑野会の財務が逼迫しつつあります。東京桑野会の健全な財務状態を維持するためにも会費納入をお願いいたします。（東京桑野会は安積桑野会とは別会計となっておりますことご承知ください）

編集後記

あれだけ注意していたのに昨春コロナに感染した。オミクロン株で毒性はかなり下がったと言われていても、年寄りにはきつく３日あまり39度の熱と数ヶ月に亘り咽喉の痛みに辛い咳が続いた。政府がマスクは自己判断で、はずしても良いと言った直後である。経済優先策が国民を欺いたのだ。コロナウイルスがいなくなった訳ではなかったのに。空咳は夏まで続き、咳をするとぎっくり腰になり、腹筋も凄く傷んだ・・・ワクチン５回も受けた代償がこれだ。油断していた、つらい！

感染時ほぼ１ヶ月間はベッドに横になっていた。今でも倦怠感が抜けず筋力が衰え体重が10キロ落ち、歳のせいなのかコロナの後遺症か分からなくなったが「このままではフレイルになる」と思い、杖を突きながらも一生懸命に外を歩いている。１日に８千歩以上と言われても、ヨタヨタ遅歩で女子高生どころか低学年の小学生にも追い越される始末。しかし保育園のお迎えを頼まれ、５歳の孫娘との帰り道は手を繋いでお話ししながらゆっくり歩けるし、ジジイのお迎えは珍しいのか保育園ではちょっとした人気者。これはこれで楽しい時間となった。家内と娘に感謝。（がっちゃん）

高校入試組よりも中高一貫組の方が６年間のスパンで効率的にカリキュラムを組める分、大学受験に有利というのは半ば常識である。ところが、新設・県立安積中では私立の一貫部では当たり前のように採用している先取り学習はせずに、文科省学習指導要領に沿った進度で深堀り、発展学習をするという。高校範囲までどんどん進んで消化不良を起こすリスクを回避して各教科に対してじっくりと探求心を養成して学習意欲が失速しない未来予想図を描いたようだ。長い人生で考えた時に、向上心を維持できればそれに越したことはない。未来のリーダーたちに幸多かれと祈る（@91、まだ現役続行組員）

浅川会長、和田副会長、石井幹事長をはじめ会員の皆さま方のご尽力、ご協力をいただき、140周年記念号の編集に携わらせていただきました。皆さま方から多様な素晴らしい玉稿をお寄せいただき、改めて心より感謝申し上げます。お寄せいただいた玉稿を拝読致し、安高時代に戻った錯覚を覚えました。私自身大変貴重な経験をさせていただいたと思っています。

３月10日現在の東大、京大の前期合格者は下記の通りだそうです（福島民報、福島民友等による）。

東大の県内全体の合格者は12名で、そのうち安積が県内トップの５名で、以下、福島３名、福島成蹊２名、会津若松ザベリオ、磐城各１名だそうです。

また京大の前期合格者の全体は３名で、安積、福島、福島成蹊各１名だそうです。

このように、母校の創立140周年を祝うかのように後輩の皆さんは頑張っています。我々東京桑野会も後輩の皆さんに負けずに奮闘していく所存ですので、当会への益々のご理解とご協力をお願い致します。（Y・S）

ここ最近縁があり、社会人劇団の基礎稽古に定期的に通っている。

元々演劇部ということもあり、劇団のメンバーからお誘いを受け、昨年の公演では音響のオペレーションを担当させていただいた。音響は、役者の芝居や場の雰囲気を裏で盛り立てる役割もあるため、公演ではクラブDJなりにノリノリで楽しませてもらった。

基礎稽古は、毎月１回程度あるのだが、内容としては、ストレッチ・発声練習・活舌・エチュード（即興劇のようなもの）など多岐に渡る。

その中でも苦手な稽古は、表情の練習である。進行役である１人が音頭を取り、それ以外の２～３人が椅子に座って顔だけで表情を作る練習である。

「嬉しい」と「楽しい」、「悲しい」と「寂しい」…頭で考えれば全く違う感情であることは分かるが、顔だけで表現するとなると、なかなか難しいものである（もしよろしければ鏡の前で是非試していただきたい。）。表情を作るには、具体的なエピソードを思い浮かべながら表情を作るというのだが、やってみてもなかなか上手くいかない。挙句の果てには「全然笑っていないよ、何か嫌なことあった？（笑）」と言われる次第である。たまに「目が笑ってない」と言われると非常に悲しい気持ちになる。

先日秋の公演が決まり、音響兼役者として参加させていただけることになった。それまでにセリフに合わせて上手く表情を作ることができるのか、今後の最大の課題である。（T.A）

本号は母校創立140周年記念号ということもあり、鋭意進めるべく、暑さの残る９月に編集をキックオフしました。また、浅川会長・石井幹事長のもと、新体制が本格化したことで密な役員会が定期的に開催されるようになり、会報編集への指導・コミットメントが強化されました。母校140周年記念にふさわしい会報・記念号ということで、編集のコンセプトを“総頁は24を目指す。記念号に相応しい内容とする”として、内容の企画をまとめ、また、多様なOB・OGに寄稿頂くことしました。

企画の目玉が「座談会」です。母校に、県立中学校が併設されることが決定、令和７年４月に１期生が入学する。これは、地元福島県の大いなる期待を集めるものです。この中高一貫校化に関して、OB･OGによる座談会を行う！どのような方に参加して頂くか・頂けるか、じっくりと戦略を練り出席交渉を行いました。その結果は！？これは東京桑野会の皆様のみならず、母校の現役生、先生方、そして母校の併設中学校の１期生になろうとしている小学生、その保護者の皆様に是非読んで頂きたいと思っております。

そして、多くのご寄稿により、全体ページ数が28ページとなりました。書いて頂いた方は多士多彩です。寄稿のお願いは、編集部からだけではなく、和田副会長や首藤会計監査が強力な援軍となり、多方面に発出いたしました。ご寄稿頂いた皆様には、改めて感謝申しあげます。

そして、毎年ご協力頂いている、母校からの表紙絵･挿絵の提供です。やっぱ、安高生になったら、旧本館の絵は描きますよね。ああ、それを見られるのは、嬉しい。ただただ、感謝致したい（と、美術の成績が３であった某・東京桑野会広報部長は思うのであります）。

皆様、来年もよろしくお願いいたします。（GF91）

この度は、浅川章会長、140周年記念事業実行委員長和田正哉様、記念号担当の会報編集委員長渡部良朋様、芳賀雅美様、さらに原稿の収集にご尽力いただきました首藤敬勝様をはじめ多くの会員のご協力を頂くことができましたことに対し事務局から厚く御礼申し上げます。今年度は来年度に向けて、当会の新規会員の獲得並びに既存会員の利便に資するいくつかの改革を行っていく所存でございます。どうぞ皆様の一段のご協力をお願い申し上げます。（事務局）

『東京桑野会会報』No.46
2024年４月１日発行
発行・編集人●石井俊一
発行所●東京桑野会
〒104-0061
東京都中央区銀座八丁目８番15号
青柳ビル７階
石井綜合事務所
Tel 03-3289-1411　Fax 03-3289-1422
E-mail asaka@tokyo-kuwano.jp
事務局ダイレクト
Email office@tokyo-kuwano.jp
URL https://www.tokyo-kuwano.jp
製　作●株式会社キタジマ
〒130-0023 東京都墨田区立川2-11-7
Tel 03-3635-4510　Fax 03-3635-4515